

彼らは

信賴しあつて

いるの

だろうか？

エッセイ I

FROM 2010 TO 2025 with POPS

エッセイ II

わたしは人に何かを言う権利がないと思っている

エッセイ III

信用が信頼を叩く

短編小説

はちみつなすび

エッセイ IV

書物

FROM 2010 TO 2025 with POPS

昨年の紅白歌合戦で、ミセス・グリーンアップルという人たちを初めて見た。

「人たち」という言い方をしているのは、彼らのことを「バンド」と呼んでいるのかどうか、わたしの知識と感覚ではわからないからだ。

いまの若い人たちは、こういうのが好きで、こういうのが胸に響くのか、ということ、不思議に思いながら眺めていた。

わたしはふざけているわけではないし、何かを馬鹿にしているわけでもない。

そもそも、わたしの年齢と世代から考えて、わたしがいまさら現代のポップスに入れこみ、ミセス・グリーンアップルに「感動した」なんて言い出すはずがないだろう。

もしそんなことを言い出したら気味が悪い。

ミセス・グリーンアップルの人たちのほうも、わたしなんかは肩入れして聞き取るというようなことは、感覚的にノーサンキューのはずだ。

わたしが考えるのはただ、現代の中高生が、どういうマイノリティでこうしたポップスに肩入れしているのだろうか、ということだけだ。

あるいは二十代の人も、ミセス・グリーンアップルに対する肩入れはあるかもしれない。わからない。

三十代の人はどうなのだろうか。

そんなことを考えるが、考えるだけで、たいして調査やヒアリングができるわけでもないの、けっきょく何もわからないまま、「どうなんだろうな」と思っている。

わたしのような世代からは、彼らがまるで、互いに信頼関係を持っていないように見える。

世代のせいなのか、それともわたしの個人的な思想のせいなのか、わからないが、とにかく彼らはまるで相互に信頼関係を持っていないように見えて、それでわたしは彼らがいゆる「バンド」に見えなかった。

それは単に、わたしのレンズが古くて歪んでおり、実像を曲げて捉えているだけで、本当は相互にばっちり信頼関係があるのかもしれない。

いちおう、ミセス・グリーンアップルと、カタカナで表記することに違和感があることは了解している。これはわたしの世代のせいではなくて、ただわたしがエディタで筆記するのに縦書きで記述しているから、というだけだ。Mrs. GREEN APPLEと聞くと、安易なわたしは、映像を観るまでは女性ガリードするバンドなのだと思っていた。

Mr. ビーンと聞いたら、例のおっさんを思い出すじゃないか。それと同じようにミセスを連想していた。

むかし、日本にはあまりポップスというものがなかった。

昭和のころ、日本では、高齢者は演歌を唄い、若年者は歌謡曲を唄っていた。

歌謡曲は何かポップスとは違った。もちろんピンク・レディーはポップスじゃないかという例外もあるだろうけれど、そこまで細かいことは、さすがにわたしも直撃の世代ではないのでよくわからない。

昭和のころ、「冬のリヴィエラ」とか「ルビーの指環」とか、「飾りじゃないのよ涙は」とか、そういったものが歌謡曲だったと思う。

ポップスらしいポップスの出現は、きつと「チェッカーズ」ぐらいからではなからうか。

若い読者にはまったく通じない話題だと思うが、そこはそれ、逆に若い人に向けてこそ、こうしたようなことはないことはいちおう語られていくべきだと思うのだ。

かつてどのようなものがあったのかということ、そしてどのようにに現在につながっているのかということは、古い世代から語り継がれるべきだと思う。いちいち把握なんかしないといけないのだ、聞きかじりが頭のすみっこに残っていればいい。

それがずっと後になって、知識を体系化することに役立つことがあるから。

(なんだアこのジジイみたいな話しぶりは)

歌謡曲の歴史は、美空ひばりとか、笠置シズ子とか、植木等、三橋美智也ぐらいまでさかのぼれば十分だと思う。

エノケンまでさかのぼる必要はないだろう、そのあたりはもう戦前の匂いとする。

ともかく、歌謡曲の以後、チェッカーズあたりでポップスが流行し、その次の世代に槇原敬之やリンドバークが出てきた。「愛は勝つ」とか「それが大事」とか、いわゆる一発屋も出てきた。

その裏側ではロック音楽が活性化していった。50年代にアメリカの黒人から発生したロックンロールは、白人のプレスリーに受け継がれ、プレスリーからイギリスのビートルズに輸出され、ビートルズが日本に輸入した。

輸入されたロック音楽に影響づけられ、サザンとか、矢沢永吉とか、ブルーハーツとか、尾崎豊とかがミュージックシーンを形成していった。スピッツも入れておいてやろうか。

時系列がだいぶデタラメだが、それでもだいたい合っているだろう。

ロック音楽以外にも、洋楽の流入はとうぜんあって、遠くから聞こえてきた洋楽は、ディスコ音楽や映画音楽を匂わせながら、J・POPと融合していった(いつから「J・POP」という言い方がされたのかは不明だ)、そのポップス方面での融合では、メディアとしては小室哲哉が先駆けということになるだろう。

ただ当時のわれわれは、あまりにウブだったため、小室哲哉のそれが洋楽の流入だということをまるで知らなかった。

洋楽の流入と共に、シンセサイザーが発達してゆき、誰もがシンセサイザーの音色を愛好するがあまり、ポップスはいわゆるシティポップというサウ

ンドへ傾倒していった。そしてその裏側では、きつと「テクノ」と呼ばれるジャンルが夜な夜な発達していった。

そうして、ポップスが成熟してゆき、ロックも浸透してゆき、音源楽器も発達していくと、90年代の中頃は、とにかくCDとミステルとドリカム、というような時代になった。一言でいえば「パワフルな歌い手」という時代で、当時の若い人たちのマインドを力強く励ます——あるいはけしかける——ことになった。

同時期、サザンももちろん活動していたが、サザンはあまりブームの筆頭という感じではなく、いつもどこか出自の違う「音楽家」のような感じだった。

「いとしのエリー」は、小室哲哉よりずっと前の曲なのに、なぜかあまり「うわあ懐かしいなあ」という感じにならないものな。

いとしのエリーなんかは、きつとスタンダードナンバーになってしまったのだろう。そうしたものはたしかに、ブームの筆頭に立つものではないかもしれない。

90年代の末期になると、全体のムードがガラッと変わっていった。

「ゆず」が出てきて、肩の力が抜けたような感じになり、「GRAY」「ラルク」が出てきて、ヴィジュアル系という呼称を受け止めかねて、当時の若者たちは戸惑った。

その後につづく、バンブ・オブ・チキンを、「これもヴィジュアル系なの?」と戸惑って受け止めかねたのを覚えている。

パワフルに励まされる、けしかけられるということが、どこからともなく終焉したのかもしれない、そういう時代だった。それが90年代末のこと。その後のことは正直よくわからない。

00年代初頭、きつとB'zとか矢井田瞳とか、大塚愛とか倅田来未とか、女性ヴォーカルがポップスシーンを席巻していったように思う。

(同時期に、アブリルラヴィーンの「Skate Boy」がヒットしたことが、女性ヴォーカルの潮流を後押ししていたように思う)

同じころ、男性のサウンドは、ヴィジュアル系から汗臭いバンドロックへ引き返そうとするかのように、ロードオブメジャーとかMONDO800

とか、マキシマムザホルモンとかに切り替わっていったはず。

わたし自身は、00年代の初頭には、すでに社会人になっており、単純にいつてクソ忙しかったので、このあたりの潮流においてはもう「当事者」ではない。

そして、00年代の後半になって、さらに大きな変化がおとずれる。

言わずもがな、ヴォーカロイドの登場、ならびに「歌ってみた」というジャンルの発生だ。要するに「メルト」だ。あるいは「炉心融解」とか「初音ミクの消失」とか。

このことはもちろん、インターネット接続のブロードバンド化、ならびに「常時接続」というテクノロジー背景に支えられて起こっている。

(若い世代に向けて言うと、それ以前はインターネットというのは常時接続ではなかったのだ。用事のたびに、いちいち電話回線に電話をかけて接続していた。そのたびに料金を取られた。いまではちよつと考えられないよなあ)「メルト」、この時代に青春を迎えた人は、大真面目にサビの手前で「鳥肌注意」をやっていたのかもしれない。

このあたり、わたし自身は、いちおう知っているつもりでいるが、やはり当事者ではないので、どこまでも知ったかぶりにすぎない。

「炉心融解」を聞いたとき、どう考えてもこれはドラムンベースじゃないかと思ったが、やはり若い人たちはウブなのできつとそんなことはまったく知らなかったのだろう。いつぞやのわたしと同じで、そういう単純なことにおいて歴史は繰り返すものだと思う。

90年代の小室哲哉の背後には、ジャングルというジャンルがあり、そのジャングルからドラムンベースというものが発展していったそうなのだ。

そんなの知るわけねえよって思うよな。

十代の少年少女というのは、何でも真に受け、何にでもだまされる存在だと思う。

それでいいのだ。けつきよく、そうして真に受けたものの中にこそ真実があるから。

それで、00年代の後半はボカロおよび「歌ってみた」の時代だったと思うが、そこから日本では10年代のはじめに東日本大震災が起こってしまった、

そこで何もかもが消沈してしまった。

震災を結節点に、もう「ニコニコ動画」「ボカロ」「歌ってみた」に(本格的に)肩入れしているという人はいなくなっていたに違いない。

その後、米津玄師という、ニコニコ動画出身の人が紅白歌合戦に出て、国民にいいよ「時代は変わりましたよ」という通告を済ませることになった。

高齢者も観ている紅白歌合戦に、ニコニコ動画出身の「歌い手」を設置したのだから。

このあたりできつと、ニコニコ動画「界限」のはたらかは、ひとつのゴールを迎えたのだと思う。

いま調べてみたが、米津玄師さんが紅白に初出場したのは二〇一八年のことだった。

えらく話がざっくりしてきたな。

ボカロと「歌ってみた」のブームは、およそ十年間隆盛し、最終的に紅白歌合戦に「歌い手」を送り込んだ、ということになると思うけれど……

二〇二四年に至るともう、若い人は「ボカロP」「歌ってみた」界限の経験者ばかりだもんね。

このあたり、けつきよくのところ、わたしは二〇一一年の震災以来、若年層におけるミュージックシーンの変遷を、まったく手触りを持っては捉えられていないのだ。

いつぞやジャンヌダルクというバンドが流行していると聞いて、「へえ、いちどは聴いてみようかな」と思いながら、けつきよく手つかずのまま、いつのまにか「それはもう古いですよ」と笑われるようになった。次いで、RADWIMPSが流行していると聞いて、関心を向けようとしていたが、けつきよく「君の前前前世から僕は」しか知らないままで終わった。

ゴールデンボンバーについて、わたしは「えつ、これってネタでやっているのじゃないの? 違うの」と理解できずに動揺するばかりだったし、「ヒゲダン」と聞いてもわたしはいつぞやのお笑い芸人の「髭男爵」のことかと思っただ。

つまり、わたしはここ十数年間について、「何が起こってきたのかまったく知らない」まま、唐突に紅白でだけミセス・グリーンアップルを見、「よく

わからない」と思って、年を越したのだった。

そりゃ、よくわからなくて当たり前だ。

10年代から現在二〇二五年に至るまでの、十五年間の変遷が、わたしの知識から完全に抜け落ちている。

このことを補完するのは、きっとわたしではなくて、世代の違う、若い誰かなのだと思う。

わたしは年長者として、ここまで何があったのかを話したので、次は若い誰かが、ここまで何があったのかを話してほしい。

どれだけ検索しても、わたしにはわからないのだ。

いつこうなったのか、なぜこうなっていたのか、十五年分の知識が欠損している。

いつのまに、YOASOBIが自殺をささやきかけ、ヨルシカが自殺をささやきかけ、ツユが自殺をささやきかけ、「ギリギリダンス」が自殺をささやきかける、ということになったのか。

そして、なぜすべてにアニメ絵が貼り付けられていて、なぜ、すべては引きつってまるで「ごめんなさい」と言っているようなのか。

ド昭和に植木等が唄ったことと、あまりに変わりすぎじゃないか。

「♪おれはこの世で一番、無責任と言われた男」ガキのころから調子よく楽しんで儲けるスタイル」

さすがにド昭和と現代は離れすぎていて比較できないにしても。

この十五年間に何があったのだろう。

現代は、まるで「大ごめんなさい時代」のようになっていく。

現代の若い人の内心、あるいは集合的無意識は、いま「大ごめんなさい」なのだろうか。

何にごめんなさいなのかはよくわからない。

しかも、大ごめんなさい時代といっても、その背後にはすぐブチギリヒステリー攻撃が控えているのでもある。

わたしは、現代の若いアーティスト（ミュージシャン？）は、この時代のここををよく捉えているのだと思う。

だからこそ、彼らはこの時代に「スベって」はおらず、ちゃんと「ウケて」

いるのだ。

昨年の紅白歌合戦では、初出場のBNZが、サプライズ演出で登場し、ステージを極端に盛り上げたので、あらためて紅白歌合戦ともども、面目躍如をもたらしめているそう。

そのことは、すごいことだが、同時にわれわれの世代においては、「そりゃあな」という感触もする。

BNZの稲葉さんが、とてつもないブチアゲ力を持っているのは、古い世代には既知のことで、さらには既知というよりすでに「信頼」という領域にあると思う。

「そりゃあな」

その信頼については、もはやあらためて畏怖させられるという感触さえする。

BNZって、唄っている内容は、今で言えば陰キャの歌なんだけどもね。

われわれの世代、どうしてもダサイ奴にしかねなかった僕たちは、どこまでも励まされたものだ。

ダサイものは、どうしようもなくダサくて、ダサイということは、つらいったらありやしないのであって……逃れられない事実があった。トホホとしか言えない現実。醜くはじめな自分を直視するのはつらい。そして、だからこそ、せめて何かを超えてみせようと奮い立つところがあった。涙ながらにだ。そのことの背後にBNZがあった。

二〇二四年末、いまも示されるBNZの健在と普遍性はすばらしいというか壮絶なものだったが、一方で、それによって若い人々を支配している現在の「大ごめんなさい発狂時代」が書き換わるかという、さすがにそうはいかないと思う。

やはり引き続き、多くの人が、自殺をささやきかける鬱ソングに、親しみを覚えて聴き入るのだろうか（百パーセント全員ではないにせよ、集合的には）。この十五年間、ポップス音楽に引き当てて、何が起こってきたのか、その変遷をわたしは知らない。

この残りを補完するのは、わたしではない、若い誰かだろう。

この十五年間に、いったい何があったのだろうか？

わたしは人に

何かを言う権利が

ないと思うている

わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

たとえば、家の向かいに、中学生の女の子が住んでいて、彼女のあたらしい髪型が似合っていなかったとしても、

「おたくの娘さんの、髪型が似合っていないと思います。変えるか、元に戻したほうがよいと思います」

というような手紙を向かいの郵便受けに投げ込んだりはしない。

それはさすがに、そんなことする奴はいないだろうと思えるが……
そうでもないのだ。

じっさいに、閉塞的な田舎では、たとえば、

「おたくの息子さんは、まだ中学生だと思えますが、長い髪を茶色く染めており、それがとても見苦しく感じられます。元の黒髪に戻してください。近隣のものより」

というような投書があってもおかしくはないのだ。

たとえば、井戸端で、

「おたくの娘さん、まだ結婚されないの？ もういい年だと思うのに大丈夫？」

みたいなことをすけすけ訊いてくるというか、詰め寄ってくるという人はいるのだ。

なぜこんなことになってしまいかというと、それはさびしさのせいだ。

じっさいに直撃されたら、ひたすら「頭がおかしい」としか感じず、たしかにそのとおり頭がおかしいのかもしれないけれど、なぜそうして頭がおかしくなったのかというと、さびしさのせいだ。

さびしきは、れっきとして、人の頭をおかしくさせる。

さびしいおじさんやおばさんは、人とかかわりがなく、誰にも認めてもらえないので、勝手に目にする誰とかかわりがあるかのような妄想を抱え込むことになる。

そういう妄想を抱えていないと、もうやっていられないのだ。

目の前の、縁もゆかりもない女性が、髪の毛を茶色く脱色し、それが自分にとって軽薄に見えたとすると、

「軽薄だからやめたほうがいい」

と一方的に言い出す。

何ならもう、正義の確信まで秘めて、言いつける、というようなことをする。

頭がおかしいのだが、さびしさに追い詰められると、人は誰だってそのように頭がおかしくなる。

「誰だって」というのはさすがに言いすぎか。

さびしすぎて自我が窮地に陥るのだ。誰ともかかわりがなく、誰にも認めてもらえず、友人と呼ぶべき友人がいない。

それで、テレビのワイドショーと友達になり、週刊誌の記事と座談して、もう若くない日々を過ごしている。

それで、まだこれから何十年か生きなくてはならないのだ。

状況が改善する見込みはなく、この先の数年後に、友人を得てにぎやかに暮らすというようなことはとうていありえない。

それはもう、頭がおかしくなってしまうぞ。

それで、老人になると、家にやってきた悪徳セールスについて引かかる。笑顔で家に押しかけてくるセールスマンが、自分の友人であるわけではないのだが、そうとわかってはいても、どうしてもさびしさのほうが勝つのだ。自分は、さびしくない、人とふれあっているんだ、という妄想にすがりつ

くほうが勝ってしまう。

自我の壁が崩壊して、自他の峻別がなくなり、自我が他者とながり、交わっているという妄想を起こす。

このことを、甘えとか自我インフレーションとか呼ぶ。

旧来は、甘えという捉え方が主流だったが、現代において、主流はすでに自我インフレーションに切り替わっていると思う。

さびしくなった老人に、セールスマンが、

「〇〇さんが、まるで自分の祖父母のように思えて……」

と情をこめて言い寄ってくると、とりあえず、

「何を言っているんだ」

と否定しながら、夜な夜な、そう言い寄られたことが自我に侵入してくるのだ。

そして侵入された自我は膨張していく。

侵入され、膨張した自我は、さしあたりさびしくなくなる。

それで人は、自我インフレーションのほうを選んでしまう。

立派なお宅ですなえと、家を褒められ、

「僕も自分の仕事をやりぬいて、早く〇〇さんのように優雅な暮らしをしたいですよ」

と言われると、自我インフレーションのほうを選んでしまう。

自分が、これまで自分の仕事をやりぬいてきて、いま優雅な暮らしに行き着いているんだという、ありもしない話を自我に流入させたいくなる。

そうすると、さびしさはなくなり、心理的にはどうしても、そのセールスマンは「憎めないやつ」になる。

「そりゃ、商売でやっているのはわかっているよ。でもまあアイツは、悪い奴ではないから」

セールスマンと一緒に、家でテレビを観て、

「この子なあ、アイドルなんだろ？ その割には、下品すぎてねえ、どうかと思うよねえ。前の黒髪のとときのほうがグッと良かったと思うんだけどね」と言うのと、

「いやなるほど、おっしゃる通りですよ。若気の至りなんですかねえ」

と真に受けて応えてくれる。

この状況は、すでにおかしい状況なのだが、当人にとっては「ごくふつう」のことにしているだけに思えている。

こうしたことは、たとえばホステス業の女性にとっては当たり前のことのはずだ。

ホステス業の女性は、いちいち意識化していないし、言語化したり体系化したりはしていないが、直観的あるいは経験的に、この現象をよく知っているはず。

ホステス業の女性に向けて、客のおじさんが、

「えー、なんだその髪色。軽薄だからやめたほうがいい」

と言ったとしても、ホステスさんはイヤな顔をしないはずだ。

「えーっ、マジ？ いいじゃん、だって気分替えたかったんだもん。けっこう似合ってるくない？」

「軽薄だって」

「そうでーす、わたしはどうせ、軽い女でーす」

「ほらまた、そうやって自分を安売りする。そういうの、やめなさいって言っているでしょ」

「はーい。あー〇〇さん、きょうは何飲みます？」

おかしい話なのだ。

人は、向かいの家に住んでいる中学生の女の子に、「髪型が似合わないから元に戻しなさい」というような投書はしない。

そんな投書をする人は頭がおいしい。

にもかかわらず、じつさいには、ホステスの髪色にいくらでも口出しするのだ。

自我インフレーションを起こしているの、自分の価値観が、目の前の他人に無節操に投げつけられる。

これはいつそのこと、こうした現象まで含めて、これは「さびしさ」なのだと定義してもよいぐらいだ。

アイドル業の女の子が、髪の色を茶色く脱色して、「イメチェンしました」と、SNSに写真をアップロードする。

するといくらでも、

「かわいい！ すっごく素敵」

「えー、似合っているけど、元の黒髪のほうがよかった、残念。でも××ちゃん自身が気に入っているなら何より」

「うーん、逆に量産型になってしまっただけ、個性が消えてしまったと思う。黒髪に戻すのもありだと思うよ」

といったようなコメントがつく。

何度も言うが、人は、向かいの家に住んでいる中学生の女の子に向けて、そんな投書はしない。

それが、アイドル業だからルールが違う、というようなことにはならない。少なくとも、おれはならない。

そういう業種だから、という言い訳が申し立てられるのは前もってわかっているが、おれは聞く気にならない。

よくよく、冷静に考えてみる。

いま、誰がいちばんポピュラーなアイドルあるいは女優なのか、わたしはよくわかっていないけれど、誰でも知っているようなアイドルや女優のトップ3があったとして、その彼女たちが髪の毛の色を変えたとして、おれが何かを言うと思うか。

言うわけじゃないか、アホか。

もし、近所の兄ちゃんが、後生大事に乗っているマツダのスポーツカーを、派手な色に塗装しなおし、それを撫でるようにワックスがけをしているのを見かけたら、わたしだって、

「お！ これはこれは、めっちゃカッコイイじゃないですか」

と言うかもしれない。

そうしたら、その近所の兄ちゃんはニンマリ笑ってくれるだろう。

それは、ここが通じ合うからそのように言うのであって、さびしいから言っているのではない。

ここが通じ合う、あるいは、心意気が通じ合うから、そのように言うのだ。

その近所の兄ちゃんは、たいしてお金もないくせに、クルマが好きで好き

でしようがなくて、無理して購入し、無理して改造し、無理して塗装してしまふのだ。

「好きなんですよ」

「わかりますよ」

という心意気だ。

わたしにはクルマの趣味はわからない。

ただ、それが好きなんだなあ、愛しているんだなあ、ということはわかる。

クルマを愛しているのか、それとも、クルマと愛し合っているのか……

若いバーニーズ・マウンテンを、散歩に連れていく人を見ると、いつもたいへんそうだが、その毛並みがツヤツヤなら、それはもう自慢の愛犬なのは誰の目にもあきらかだ。

「お、バーニーズ！ やっぱバーニーズはカッコイイですねえ、名犬ですねえ。しかもこの子はとても賢そうだ。おお、よしよし」

大型犬を飼うのなんてきつと大変だろうけれど、愛しているし、愛し合っているのだろう。その心意気が通じるからそのように言うのだ。

なんでアイドルのSNSアカウントに、髪型についてのコメントを言うのだ？

向かいの家に住む中学生の女の子の、髪型が変わったとしてもそんなことに投書なんかしない。

ホステスさんの髪が金色になっていたとしても、

「おお、キマってんじゃない」

としか言わない。

わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

仮に、わたしの家の前に、中学生の女の子が住んでいたとする。

しかも、その女の子は、わたしと気安く、親しかったとする。

その彼女が、髪型を変え、化粧をしてきたとする。

そして、その髪型はあきらかにヘンで、化粧もけばけばしくてヘンだった。

そして彼女はわたしに向けて、

「ヘンでしようか」

と訊いてきたとする。

わたしはどう答えるべきだろうか？

あなただったらどう答えるだろうか。

わたしは本心でしか答えない。

まったく無意味に強調しておくが、わたしは本当に、本心でしか答えない。

わたしはたぶん第一声、

「ぜんぜんヘンじゃないよ」

と答えるだろう。

わたしの本心だ。

わたしは本心でしか答えない（しつこい）。

「おおげさな髪型で、不慣れな化粧だ、でも別にヘンじゃない。かわいいし素敵だ」

この髪型と化粧で、人に会えば、髪型と化粧がヘンだと言って笑う人もいるかもしれないが、そういう奴はたいはいひどいブスだ。ひどいブス女か、頭の悪いゴミ男だ。だから気にしなくていい。

ガキというのは、精神の中身がカビの生えたサツマイモみたいなものだから、しょうがないのだ、一ミリも気にしなくていい（この一文はあきらかに要らない）。

このおおげさな髪型と、慣れていない化粧は、あなたによく似合っていて、とても素敵だから、どうぞこれからかけがえのない、素敵な一日を遊んでいらつしやい。

おれは本心からそう思ってそう言うだろう。

何がヘンかといえば、彼女のおおげさな髪型と、慣れない化粧のことを、指さして笑う連中のほうがヘンだ。

わたしに判断力がないわけではない。

わたしの判断力においては、彼女の場合、髪型をいじるのは「それなり」のていどでいいだろうし、化粧は「ちょこっと」でいいと判断する。

どのていどが彼女に「似合う」のかも、さすがにわかる。当たり前だ。

だが、そのクソつまらない判断と、わたしの「本心」は別だ。

わたしの本心は、彼女の髪型と化粧を、似合っていて、かわいくて、素敵だ、と言っている。

すばらしく、かけがえのない一日を遊ぶべきだ、と言っている。

いちおう、ジジイみたいなこととして、

「きょうのあなたは、素敵な髪型と化粧で愛されるだろうけれど、仮にこれらのすべてをやめて、すっぴん顔のボサボサ髪で遊びに行ったらしても、あなたは同じように愛されるだろう。それはそれとして、いつてらつしやい」ぐらいのことは言うかもしれない。

われわれが目の前にしているのは、美容のコンテストでもなければ、化粧品媒体広告でもない。

目の前にしているのは彼女と、彼女の魂と、彼女の青春だ。

彼女が、彼女自身を傷つけて貶めようともしないかぎり、彼女に似合わない髪型や化粧などというものは存在しない。

これについて、一部のアホは、どうしても次のように考えるのだ。

「え、だって。髪型はヘンだし、化粧もヘンじゃん。ヘンなものはヘンじゃん」

お前の脳みそはワセリンで出来ていて、お前の眼球は天然ゴムで出来ているのか。

可燃ゴミに出すぞこの野郎。

本心で話さない奴に信頼を覚えることはできない。

一部のアホは、本心と本音の区別がつかないのだろう。

そして、宇宙のどこにも必要とされていない、ボクの本音をつぶやいてまわるといふ、近所迷惑な自我インフレーションを起こしているのだ。

罰として、反省しながらアンドロメダまで歩いて帰ってこい。

髪型がヘンとか化粧がヘンとか、そんなことは誰だってわかっている。誰だってそれぐらいのセンスはある。眼球がついていればそれぐらいのセンスは誰にでもあるのだ。

もし、どうしてもそのセンスが気になるということであれば、わたしはただ彼女をどこかのちゃんとした百貨店に連れてゆき、その化粧品売り場にいる専門家のおねえさんに、それっぽくしてやってくれと頼むだけだ。

現代だと、そうして中学生の女の子を連れて行ったら、それだけで犯罪になるのだからけれど、そのときはかまわん、おれが犯罪者になれば済む話だ。

犯罪者として通報してくれ、そんなこと何の関係もない。

何が犯罪かといって、女の子の髪型や化粧に勝手な口出しをしているほうがよっぽど犯罪だ。

わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

だから、わたしは、人に何かを言わない。

わたしは本心で「話す」だけだ。

本音で何かを言う、というような、閉塞したさびしさの権化みたいなことは決してしない。

これを読んでいる若い人は、本音と本心の区別をつける。

そして、本音が漏れているだけの人、本心で話すということができない人のことを、あなた自身が本当には信頼していないということを発見しろ。

本音と本心はまったく別のものだ。

大切なことだから少し例を挙げよう。

たとえば、わたしは本心から話す、人は、どうしようもなく忙しいという人以外、できたら、ひととおりの料理を覚えるべきだ。

料理の、やり方やレシピを覚えるのではなく、「料理」というそのものを覚えるべきだ。

もちろん、他のことで忙しすぎる人は、さしあたりあきらめてしまってしまわない。

「料理」というそれじたいの営為を覚えるべきだ。それは知識ではないしノウハウでもない、しかもテクニクでさえない。

「料理」というものがあるのだ。

家庭科で習えるものではないし、料理クラブで習えるものでもない。

なぜ料理を覚えるべきなのか。

それは、必須だからということではなく、身近でおトクだからだ。

自分で食べる食事を、料理できるということ。

このことは、とても原始的で、それだけに直接、自分が生きるということの自信につながってくる。

楽しく料理できて、おいしく料理できると、かなりのていど、楽しく生きられるという自信がついてくるのだ。

それがなぜなのか、はっきりした理由はない。

もっと原始的なものだ。そのことは、料理ができるようになったらわかる。料理ができるようになるというのは、すり流しや骨蒸しや利休寄せが作れる、ということではない。

バターロールに切れ目を入れて、香薫ソーセージとレタスとマヨネーズをぶっこみ、これで「うまい」と確信できるということだ。

料理ができない人は、その「ぶっこむ」ということを、確信をもってやれない。

そうした、料理の本質は、あなたが信頼する誰かに教えてもらうべきだ。

やり方を教えてもらいつつ、同時に、何かを伝授されるのだ。

この人が、パンにソーセージをぶっこんだら「うまい」、そう信頼できる人から、そのぶっこみ方を伝授してもらうのだ。

(本に載っている人でも、動画に出ている人でもかまわない、私淑でかまわない、成否は信頼という一点だけにかかっている)

わけのわからないことだが、料理というものはそうして獲得される。

稽古とか、師匠と弟子とかは、そういった形式でしか得られないのだ。

料理を伝授され、獲得したとき、我が手で「バターロールに香薫とレタス

とマヨネーズをぶっこんだらうまい」というのが確信される。

そうなったとき、自分が一定の幸福を得るために、大間のマグロは必要ない、ということがありとわかる。

バターロールに切れ目を入れて、そこに生きる全力をぶっこむのだ。

信頼に至った者の手にはその力がある。

生きる全力をぶっこんだバターロールからは、生きる力の味が返ってくる。

うまい。

生きる力がみなぎってきて、生きるということの自信になる。

こんなことが毎日の基本になる。

いつだってそれがやれるのだという自信になる。

だから、できたら、毎日がクソ忙しくてどうしようもないという人以外は、料理というのは、ひととおりに身につけたほうがよいのだ。

もちろん、信頼できる師匠に出会うまでは閉塞するしかないのだけれど。

それにしても、もう二度と、

「料理？ えーっと、本を見ながらならできます」

というウソをつくな。

「料理は、未だ師匠を得ておりませんで、到底まともにはできません」と言え。

というわけで、わたしは本心から、めずらしく料理なんてことについて話した。

これについてあなたは、わたしから何かを「言われた」と感じるだろうか。

そんなことはない、あなたはただわたしの話をいつのまにか聞いたただけだ。わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

「その髪色は軽薄だって。元の黒髪に戻したほうが絶対いいよ。あとその化粧もさ、慣れていないんだと思うけれど、ごめんね、けばけばしくて正直ヘンだよ。それと、女性だからってわけじゃなくて、料理はぜったい勉強したほうがいい！ 自分で自分の食事を作るのって、原始的なことで、自分が生きる自信になるから。しかもさ、料理って毎日やることだから、出来るようになる、身近でお得なんだよ？ これ、いちおう本気で言っているし、ぼくの本音なんだ。ぼくが本音で言っていて、ウソを言っていないってこと、わかってくれるよね」

こんなものは会話でも何でもない。コミュニケーションがブツ壊れている。さびしい人が、慰めに自我インフレーションに駆られ、そのまま数十年を生きてきたのだろう。

自我インフレーション者は、自他の障壁が壊れているので、「本音」であなたの自我に侵略を仕掛けてくる。

つまり、

「髪色を黒に戻し、ナチュラルメイクにして、料理の勉強をしろ」と言ってくる。

本音、あるいは「ホンネ！」とカタカナで書いたほうが印象的だろうか。わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

わたしは、人に、ホンネで侵略する権利はないと思っており、そんなことより、本心から話すという態度と能力を持つべきだ、と思っている。

向かいの家の、中学生の女の子は、おおげさな髪型と慣れない化粧で、かけがえなくかわいく、素敵だ。

彼女がバタロールに全力ソーセージをぶっこんでくれたら、その料理はきつとうまいだろう。

わたしの言っていることは、きつとそれなりにまともなことで、聞いてりや誰だってそのようであるべきだと思う。

だがにわかになんかはいかない。

「信頼」がないからだ。

表面上をなぞっても、「信頼」は生まれない。

「信頼」ということの手ごわさ、そしてどうしようもなさ、あなたのころの内部で、何か暗転のようなことが起こる。

その暗転は何なのか。

その暗転が「さびしさ」だ。信頼の輝かしさが暗転するとさびしさが浮き出る。

さびしさと信頼が対極の関係にあるということがよくわかる。

信用が 信頼を 叩く

信頼を、叩く叩く叩く。

現代人はそれでさびしさを紛らわしている。

社会的信用というイメージで、信頼を叩く。

信頼は事実だが、信用はイメージだ。

(ただし金融を除く)

たとえば、マレーシア航空の飛行機が墜落したとする。それも、立て続けに三機、わけのわからない墜落をしたり、原因不明の行方不明になったりしたとする。

人々はどうぜん、マレーシア航空の利用を避ける。

そうなると、マレーシア航空はつぶれる。

マレーシア航空の飛行機が、立て続けに事故を起こしたのは、航空会社のせいではなく、飛行機メーカーのせいだったかもしれない。

つまりボーイング社のせいだったかもしれない。

あるいはマレーシア政府のせいかもしれない、あるいは周辺の戦争状況のせいかもしれない、テロのせいかもしれない、はたまた空港の管制のせいかもしれない。

けれども、とにかくマレーシア航空は「危険」というイメージがつく。イメージも何も、行方不明になって、墜落して、人が死んでいるのだから、危険だと人は確信する。

「イメージも何も、ヤバいっしょ、マジ無理っしょ」

じっさい、マレーシア航空は、マレーシア航空じたいのやらかしもありながら、それにしても「不幸」が続き、利用者に見放され、再建のために一時国有化されることになった。

廃業や解散は避けられたらしいが、つぶれていてもおかしくなかった。

信頼と信用は違う。

映画「フライト」の機長は、機長として信頼に足る男だった。

しかし彼はアル中だった。

彼は友人らに囲われて、断酒することになった。

彼は酒をやめると言った。

けれども、アル中の言うことなんて信用できない。

アル中の言うことを信用するなんていうことは、アル中の当人にとって残酷なことだ。

酒を飲まない、と言っていることが、信用できるなら、その人はアル中ではないのだ。

アル中になった人は、もう根治はしないので、以降はもう、アルコールをひたすら拒絶する、ということしか対処法がない。

そのまま本当にアルコールを断絶できている人もいるが、そうした人は、奇蹟の中にいると言っている。

どうせダメになる、とは思わない。

わたしは奇蹟を信じる者だからだ。

わたしがアテにするのは奇蹟であって信用ではない。

当人が、奇蹟を拒絶したら、そのとたん、もう呑み込まれていくだろうな。アル中に限らず、依存症というのはそういうものだし、依存症にかぎらず、ひとのころとはそういうものだ。

もしひとのころが信用だけで戦えるものなら奇蹟なんて必要ねえんだよ。

それはともかくとして、映画「フライト」の機長は、機長として信頼に足る男で、アル中として信用できない男だった。

では機長は、男としてはどうだったか。

それも、アメリカの男として、信頼に足る男だったろうか。

そのことは、映画を観て確認してくれ、胸に突き刺さるとてもいい映画だ。われわれはここ数年、信頼できる人を、叩く、つぶす、破壊する、ということにかまけてきた。

具体例は出さない、具体例なんか出さなくてもわかるだろう。

他ならぬわれわれ自身がやっていることなのだからわからないはずがない。

なぜ信頼できる人を、叩き、つぶし、破壊しようと努めてきたかという、それはやはりさびしさのせいだ。

これにかかわる不特定多数の全員が「さびしい人」だということを、われわれは直覚において知っている。

ルイ・アームストロングが唄うのを真に受けながら、光輝に満ちてそのような叩く・つぶす・破壊するをやってきたわけじゃない。

さびしさに駆り立てられて、そのようなことをやってきた。

さびしさ、つまり、自身が「信頼」に至れないということ。

自身が信頼に至れないので、信頼できる人を叩くという発想と衝動に駆られた。

もちろんこのことに、個々人のところあたりはない。

こうしたことは、集合的に起こっており、集合的無意識がわれわれを支配していて、われわれ個々人はその集合的無意識のあやつり人形だから、個々人にこのころあたりはないのだ。

あなたは面倒くさがるかもしれないが、大切なこととして、次のような話をしよう。

面倒くさがらずに、なるほどそういうものかと理解するよう読みなさい。

あなたがいま、叩かれているなあ、つぶされたなあ、破壊されたなあと思える人を、五人ばかり思い浮かべなさい。

彼らについて、あなた自身がどう思うか、あなたの心境はどうであるか。考えてみる。正確に述べてみようとする。

そうすると、「ぐわーん」と、頭が揺れるような感じがして、思考は行方不明になり、感情は無意味に攻撃的になるだろう。

そんなふうに、「ぐわーん」となって、あれこれ迷うけれど、けっきょくのところ、そうして叩かれたものについてあなたは否定的なはずだ。

つまりあなたも、本当に擁護する側にはもう立てないということ。

すべては無意識側で起こっていることなので、あなたはこのことを明確に捉えられない。

捉えようとしても「ぐわーん」と頭の中が揺れてきて、あなたは眠くなったり、思考が混濁したりする。

（無理をすると精神に強い負担が掛かるので、無理はしないように。けっこう簡単に心身症になることがあります）

さてここで、あなたをタイムワープさせる。

タイムワープ！

あなたは十数年前の時代に戻った。

あなたはそのとき、さきほど思い浮かべた五人に対して、否定的に攻撃する心境を持っているだろうか。

タイムワープした直後は、まだその心境が残っているかもしれない。

けれども半日も経たないうち、あなたのその心境は消え、別の心境に乗っ取られるのだ。

十数年前には、世間において、その五人はまだ、集合的に否定や攻撃をされていないからだ。

これはいわゆる同調性バイアスなどではない。

あなたのところはあなたのものではないのだ。

あなたのところは75%、他人のものであり、世間のものだ。

だからあなたのところは常に世間に乗っ取られる。

世間に乗っ取られるので、その世間の側が変化すると、あなたのところも変化する。

あなたのところに連続性なんかないのだ。

さっきまであなたが自分にここに確信していたことは、いまこのときあなたが確信していることと、まったくつながっていない。

あなたの思い浮かべた五人は、十数年前には、集合的に否定・攻撃されていないので、その時空に立たされたとき、あなたの心境からもその否定・攻

撃は消えていってしまう。

そしてあなたは、その時代が、二〇二五年ほどにはさびしくなかったのだということを知らう。

その時代、人々はまだ、信用のイメージよりも、直接の信頼というものをいくらか持ち合わせていた、ということを知らう。

すべてはあなたのせいではないし、かといってすべてはあなたの功績でもない。

その時代ごとの、世間、その集合的無意識が、個々人のところを乗っ取っているだけだ。

さてタイムワープはおしまいだ、現代に戻ってきなさい。

渋谷区・目黒区・世田谷区においては、いまでも毎夜のように、ちゃんと若い人たちがお酒を飲んで大いに盛り上がっている。

中には、若い人のふりをしているだけの人もあるけれど、それはもう言いっこなしだ。高齢化社会なのだからしょうがない。だいいち、それについてはおれも人のことをまったく言えない。

盛り上がっている中、女の子たちはみんなものすごくおしゃれで、魅力的で、かわいらしくて、セクシーで、清潔だ。

もちろんダメな感じの女性もいるが、それはいつの時代だって同じだろう。それも言いっこなし、というかわざわざそっちのほうに注目しない。

かわいい女の子たちに対比して、男たちは、やっぱり単に声がデカい。最近は身体を鍛えている人がすごく多く、その体軀はいかつい。それを見せつけるように振る舞う。それで、肉体派の男はオラついていた、そうでないフェミニン派の男は気取ってクールに振る舞っていたりする。

どちらであれ、その場でお目当ての女の子たちにウケているのであればそれでいいだろう。グッドジョブだ。もちろん少々スベっている人もいるが、それだってやはり、わざわざそっちのほうに注目しない。

みんな年齢なりに、とうぜんの若さがあって、かといってガキつちいというわけではない。

盛り上がりながら、みんなちゃんと大人だ。

どちらかというと、おれのほうが大人じゃない。

おれは大人じゃないからな。

というわけで、やはりいつの時代も変わらず、年長者ほどナウなヤングを称揚すべきだと思うのだが、一方でわたしの内に、余計な空想も立ち上がってくる。

大きな声でオラつき、女の子たちにウケている（と思われる）、いかにも心理的な存在感を放っている男に、

「お前なこと信頼している人って、ひとりもおらんぞ」

と、いきなり言いつけたらどうなるだろうか。

そんなことを空想する。

これはあまりにもひどい。ひどいというか、これではわたしがただの陰キヤだ。

「お前のこと信頼している人って、ひとりもおらんぞ。それどころかお前自身も、周りの人を誰ひとり信頼していないぞ」

だから本当はさびしいんじゃないのか……

これはなんという陰キヤ発言だろうか、こんなものまったく謂（いわ）れない誹謗中傷でしかない。

まったく謂れない誹謗中傷であればそれに越したことはない。

本当にそう思う。正直、ずっとそのように祈り続けているところがある。

しかしわたしは内心で思うのだ、

「彼らは信頼しあっているのだろうか？」

盛り上がっているのはわかるし、楽しいのもわかる。女の子はみんなおしゃれでかわいい。魅力的でセクシーだ。

酒に酔えば、みんなして肩を組みだすほど仲が良い。

彼らは信頼しあっているのだろうか。

こんなえげつないことを、若い人は考えなくていい。

精神に負担のあることだ。

だから代わりにわたしが考えている。

【怒号】仕事まじダリい、遊んで暮らしてえ、超セックスしてえ、ワンチャン仮想通貨で勝ちたい、それでFIREしたい、推しがマジやばい、誰かおれを養ってくれ、これエロくね？ マジ有名になっておいしい思いをしてえ。

ちよつとマジむかつく、ちよつとマジありえないんだけど。

彼らが大声で言っていることは、決してウソではないと思う。彼らの本音であつて、楽しく酒が飲めるだけ本音をぶちまけあうというのをもまったく悪いことではないのだろう。

だが彼らが本心から何を話し合っているのかはまったく聞こえてこない。「これちよつとマジトークなんだけど、あのさあ、マジでさあ」

マジトークと言っている、その意味はわかるが、それは「本気で焦っている」という意味でマジなのであつて、本心から何かを話すということの前置きではない。

そもそもわたしは「マジになる」ということじたいに否定的だ。

先の段で、わたしは料理について本心から話したが、そんなどうでもいい話、まさかマジになつて書いたわけではないだろう。

わたしの関心というか、わたしの焦点はただひとつ、次のことにある。

「彼らの本心は『さびしい』のだろうか？」

むろんそんなことを、彼らに訊いたり、聞いただしたりする意図はない。そりゃそうだろう、誰がそんなマジな話をしたいものか。

わたしの関心は、その一点に向かつているが、それを聞きたいかというところ聞きたくはないし、仮に聞かせてくれると言っても、わたしはお断りしてひとりで帰路につくだろう。

わたし自身はどうだろうか、わたし自身はさびしいのだろうか。

それについては、正直なところ、もうずっとむかしに、わたしは自分を信頼するというほうへ自己決定してきたので……

仮にわたしが「さびしい」なんて言い出しても、あまりに説得力がなさすぎるだろう。いわゆる、へそで茶を湧かすというやつになるはず。

おれなんかはそれでよろしい。

わたしが生きているうちに得るべきところと魂の何かが、トータル 10 ポイント必要だったとしたら、わたしはそれをすでに 4,000 ポイントぐらい頂いている。厚かましすぎるのだ。

そんなことはどうでもいいとして、仮に彼らが、本心においてはじつは「さびしい」ということがあつた場合、冒頭で示した疑問についてはいちおう整

合がつく。

本心においてはさびしいから、自殺をささやきかける鬱ソングばかりここに染みる。そういうものが流行する。

一方、さびしさを慰めるために信頼できる人を叩いて破壊することばかりにかまけてきたから、本心は大ごめんなさい大会になる。

侵略的な「ホンネ」ばかりが、四方八方から滲（し）み出してきて、誰も本心から話してくれないから、誰ひとり信頼できない。

だから侵略に対して反発的にブチギレ攻撃が出る。こころの声は「うっせえわ」になる。

一方で、冷静な視点としては、自分自身もその侵略的なホンネを滲み出させるばかりで、本心から話すわけではないというのを知っている。だから、それについて「大ごめんなさい」となる。ブチギレと反撃とごめんなさいが混在して、女性の場合などは「可愛くてごめん」になる。

つまり、

・侵略してくんな！

・こっちはもつとドギツイホンネで反撃しますけど？

という精神の態勢がでかあがる。

この十五年間にあつたことを、やはりわたしは、皮膚感覚では追跡しきれていない。

いま、こうなっているのではないかという捉え方はできるが、なぜこうなってきたのかということをつまえられない。

本当はさびしいのではないだろうか。

本当はさびしいということをわたしは責めているのではない。

当たり前だ、なんで人がさびしいのを、わたしが責めるんだ、そんな文脈はありえない。

さびしさに、向き合えていないという問題はある。しかしそれだって、責めるような筋合いのことではない。

わたしが思うのは、このことへの対抗手段、さびしさへの対抗手段がない

のではないかということだ。

対抗手段がないと閉塞に陥らざるを得ない。

推し活でさびしさが解決するというのは誰が見ても無理がある。

大金持ちになって豪邸に住み、上等な異性をゲットして、海外旅行をしまくり、それらをSNSで拡散して自己顕示欲や自己承認欲求を満たしたとしても、やはりさびしさは解決しないだろう。

誰とも信頼関係はないのだから、どんな家族を得て、どんな友人と酒を飲み、どんな土地を旅し、どんな人々と交流し、どんな芸術に触れても無駄だ。

信頼ということから切斷されている以上、何をどうやっても無駄だ。

さびしさの中に居続けるしかない。

こうなってくると、人は早晚、宗教に行き着くのがわかる。

宗教、特にカルト宗教は、

「この教祖は、特別な人なのです、わたしたちは教祖により、特別な絆で、結びついています」

という感じで迫ってくるから、さびしさから脱出不能になった人は、このカルト宗教の言い分にすがりつくしかなくなる。

信頼って何なんだろうな。

信頼って、そんなに珍しいものだったっけ。

信頼って、かつてはもっと、当たり前というか、むしろそっちが土台にあった気がする。

諜報部員の人は別にしてだ。

諜報の世界においては、標語として、

「ママが愛していると言っても信じるな」

と言われる。

そりゃ諜報部員だからな。

諜報ってつまりスパイのことね。

戦時下というのはこのスパイの常識がすべてにおいてそのまま罷（まか）り通るから困る。

また、諜報の世界においては、人はカネで転ぶ、ということになっている。

人はカネで裏切るのだ。

人が、カネで裏切ることがある、ということではなく、人はカネで動くという力学が前提になっている。

もちろんごくまれに、カネで動かない人、カネで裏切らない人、カネで転ばない人もいるのだが、それは特殊な人というか、変人だ。

幕府がいくらカネを積んでも吉田松陰は寝返らなかつただろう。

だから、吉田松陰は、信頼に足る人だった。

ということは、カネで転ばない人はつまり、さびしくない人なのかもしれない。

人は、カネで転ぶし、弱みで転ぶし、ついでに男性は女で転ぶ。

（あともちろん暴力でも転ぶのだが、それはあまりに悲惨なことなのでここでは描写しない。暗殺を予告されると政治家は転びます）

大学のテニスサークルAで活躍していたサークル長のAくんがいたとす。テニスサークルAには色気がない。

一方、ボウリングサークルBが美女ぞろいで、そこに入れば美女を喰い放題ということになると、Aくんは、ボウリングサークルBに転属する。

そりゃそうだろう。

転ばなければAくんは変人だ。狂っている。

Aくんは、ボウリングサークルの金持ち美女B子に、性的に変態と言える写真を撮られ、弱みを握られてしまった。

ただAくんが、テニスサークルを辞めてボウリングサークルに所属するなら、その写真を表沙汰にしないでもらえろし、それだけでなく、Aくんは広いマンションと高級外車を買って与えてもらえろということになった。

どこからそんなカネが出てくるというのか。

B子の財力をもってすれば、そんなものは何でもないんだ、ということだつた。

「ね、だから、何も悪い話じゃないでしょ。わたしたちと楽しくやりましょうよ」

B子は親し気に微笑む。

するとAくんはどうなる。

Aくんは、ボウリングサークルに転属し、弱みが表沙汰にされない、とい

うことを選ぶ。

それどころか、広いマンションと高級外車を買ひ与えられ、しかもおこづかいまでもらえるから、これまでやっていた引越しのアルバイトという肉体的にきつい労働をしなくて済むようになる。

あのうざったい社員ドライバーと、せまっ苦しい車内を過ごさなくてよくなったのだ。

解放されたあ、と感じる。

Aくんは八万円のサングラスを買ひ、十五万円の靴を買った。

潤沢に使えるカネがあるということは、Aくんに単純かつ強力な自信をもたらした。

それで、ボウリングサークル以外の女の子からも、ちやほやされてモテるようになった。

まわりが僻（ひが）んでも、無駄無駄、じっさい使えるカネが潤沢にあるので、

「ごめんね」

としか思わない。

機会を掴めない奴に、才能がないというだけのこと。

ゆくゆくは就職先もB子からあっせんしてもらえるだろう。

そして彼は、買ってもらった広いマンションで、学生のあいだ、ボウリングサークルの美女たちその他と、好きだけセックス三昧をする。

ちやうどボウリングサークルには、あつらえたように彼好みの美女が色とりどりにいて、しかもなぜか、みんな驚くほどAくんに従順だ。

どんなブレイを要求しても、女の子たちは断らない。

それどころか、イヤな顔ひとつ見せず、むしろうれしそうにほほえんで、そのブレイ指示に従ってくれる。

「もつとわたしたちに、命じてくれていいのよ？ うふふ」

いいなあ……

これはAくんの人生にとって、最上の展開であって、これを否定するようでは、もうAくんは生きている意味がないではないか。

これの反対側にあるのは何だ。

これの反対側にあるのは、Aくんが色気のないテニスサークルに残り、変態の証拠写真をバラまかれ、すべての知人から消えようのない「変態でサイテー」「キモい」「クズ」の烙印を押され、知らない人からさえクスクス笑われ続け、年下にネタにされ続け、サークル長の座を追われるどころか、テニスサークルから追放されるというコースだ。

世間に知れ渡ったド変態をサークル長にしていられるわけがないし、そんな奴がかつてサークル長だったというだけでもまずいので、サークル員たちは彼の名を名簿から除籍するだろう。

彼はその後、友人もなく孤独に、狭いアパートに住み続け、大家に「この変態ってアンタらしいな」と写真を突きつけられ、呆れられ、それでも頭を下げて住まわせてもらい、あとはえええん、肉体的にきつい引越しのアルバイトを続けることになる。

社員ドライバーの体臭が今日もキツイ。

何日も歯を磨いていない口元を、社員ドライバーは爪でほじくっている。

「あのさあ、お前ってさあ、六十歳のババアとか抱ける？」

「……さあ、どうなんですかね」

「アソコがめっちゃ臭かったりしたらどうする？　それで、舐めるとか言われてよ」

「さあ、どうするんでしょうね」

「お前ってチンコ何センチあるん？」

「測ったことないですね」

しんどい。

この差分において、前者と後者、Aくんはどちらを選ぶべきなのか。

こんなもの、もはや考えるまでもない。

冷静に理知的に考えろ。

Aくんは後者を選ぶべきだ。

前者なんか選んでどうする。

ん？

書き誤ったのではないぞ。

後者はたいていクソだが、自分にふさわしいクソじゃないか。何の不満が

ある。

前者は自分にふさわしくない大クソだ。

どちらを選ぶべきか、目を覚ませバカタレ。

元いたテニスサークルを除籍されて、あらたに、個人でテニスサークルでも立ち上げる。

もちろん入部者なんて誰も来ないだろうから安心しろ。

毎日、新入部員を待ち続けてひとりで活動しろ。

カネに転ばず、弱みにも転ばず、女にも転ばなかったAくんは、テニスサークルを追放されて、悲惨なバイトを続けているけれど、なおも自分でテニスサークルを立ち上げて、その運営をやるうとしている。

このAくんは「変態でサイテー」「キモい」「クズ」なのか？

もちろん、信用は恢復しないから、信用調査においてはそのとおり、変態でサイテー、キモくてクズだ。

でも信頼においてはどうか。

信頼においては、たぶんわけのわからない変人だが、信頼はゼロではない。自分が何をやるかを、自分で決める奴なんだという一点で、信頼はすでに生まれている。

前者のコースを選んだとき、Aくんは生涯、自分のことを信頼できないし、他の誰のことも信頼できなくなる。

「信頼」のほうで調査すれば、前者のほうがサイテーでキモくてクズってことじゃないのか。

あくまで「信頼」のほうで言えばな。

Aくんが後者のコースを選んだとして、その後のAくんは、まともな友人や青春が得られるのかどうかは知らない。

Aくんと信用付き合ってくれる人はいないだろう。

社会的信用性はゼロどころがマイナスだからね。

だが、世の中にまだ「信頼」のほうをアテにする人が残っていたら、Aくんのところにはやがて、Aくんを遠くから見ている人がやってくるだろう。その人は、

「お前、すげえよな」

とおずおずと言ひ、その信用のガタガタぶりとは裏腹の、わけのわからない信頼を認めてくれるだろう。

Aくんが、

「部室の前を、たがやして、花壇にしよう」

と言ひ出したら、他の部員たちは、返事をする前に了承して引き受けてい

るだろう。

そうしてAくんが、信頼をもとに友人たちを得た場合、彼らは都心で酒を

飲んだとしても、

「それな」

「ワンチャン」

「マジさあ」

という怒号をやりあわないと思うのだ。

Aくんのホンネには、黒歴史がなければよかったのに、と嘆く気持ちがゼロではないかもしれない。

けれどもAくんは、あたらしいサークルを、本心から運営しているだろう。

もはやAくんには本心しか残っていないからなあ……

友人と酒を飲むときも、本心から飲み交わすんじゃない？

卒業間際、Aくんが、女性であるあなたに、

「あなたのことがずっと好きでした。僕は、こんな奴ですが、卒業してから

もあなたと会いたいと思っています」

と告白したとする。

あなたはそのとき目の前のAくんを、

「変態でサイテー、キモい、クズ」

と感じるのだろうか。

社会的信用としてまったくそのとおりなのではあるけれど。

誘いを受けたあなたは、Aくんとふたりで食事に行くだろうか。

あなたがAくんと食事に行くとなったら、あなたの周囲の知人たちは、

「えええええー？」

と引きつって言い、

「マジありえないんだけど」

と爆笑し、

「やめときなよー あんた気が狂ったの？」

と大声を出す。

全員で、

「きつも〜」

と合唱する。

社会的信用においてはAくんはのように評されるとおりの人だ。

あなたは誰を信頼するか。Aくんか、それとも周囲の知人たちか。

ここまでの話を聞いていたら、あなたはAくんを信頼するほうを選ぶだろう。

けれども、せっかくなのでここで知っておくといい。

人は「転ぶ」のだ。

さっき述べた通り、人は力学のとおり転ぶ。

じつさいのケースでは、あなたは周囲の知人たちの圧力に負けるのだ。

あなたがAくんの信頼のほうを選べば、そのことは、あなた自身の信用評価を下げてしまう。

あなたはいろいろ、やっていけなくなる、と感じる。

あなたは選択肢を限られ、限定され、狭められていく。

それである決定に「追い込まれていく」。

諜報においては基本的な考え方だ。

力学はあなたにAくんを選ばせない。

「まあさすがに、アレとふたりきりで食事までは無理だわ。ネタにできる範囲を超えているし、なんかわたしまでいわくつきの奴にされそうで怖いw」

あなたは合理的な、ほとんど唯一の選択をする。

その選択は正しいのだが、それ以来、あなたは自分が信頼できなくなつて、ある種のさびしさの中を生きていくことになる。

これは、そうなるぞとおどかしているのではなく、そういうものののだ、とジジイみたいな通告をしているにすぎない。

人生なんてそんなもののさ。

(おれの場合を除いてはね)

あなただけでなく、他の誰もが、そうして自分を信頼できなくなるということ積み重ねてゆき、次第にさびしさを濃くしてゆく。

その中を生きていくことになる。

その力学、「信用のために信頼を放棄せねばならない」という力学に、逆らうすべはほとんどないのだが、せめて生きているうち、なにかひとつでも残せたらいいな。

そんなふうに思わないだろうか。

あのときの自分は、信頼に足るものがあつた、と。

そんなことが、ひとつでもあれば、人はじゅうぶんに誇れるものを持って生きたと言えるのだと思う。

さびしさはしょうがないけれど、何もかもがさびしさではなかったと、わずかながらそれ以外のものもたしかにあつたのだと、そのことは胸を張って断言できるじゃないか。

そうして、信頼できる「あのときの自分」をひとつでも残しておけば、あなたはヨソの誰かの信頼について、それを叩く、叩く、叩く、つぶすというような衝動に、呑み込まれることはなくなるはずだ。

たぶん……

たぶんだけどね。

さびしさに呑み込まれた人は、誰とでも社会的信用の野合を企み、ヨソの誰かの信頼を叩く。

もはや信頼アレルギーというような様相になって、血まなこで叩くのだ。

社会的に「ちゃんとしている」「ふつうの」「何も悪いことをしていない」自分たちが、まさかAくんみたいな訳アリ物件より、信頼においてははていどが低いということになったら、そんなことはまずいだらう。

そんな屈辱的なことを受容できるわけがない。

だから信頼という事象じたいを叩く。友人でない人たちと野合して叩く。信頼という事象じたいを否定しようとする。

「身内でもない者がさあ、信頼とかって基本ウソでしょ」

一般的にそういうものだからこそ、諜報の世界では、人は力ネで転ぶという力が力学として信用されているのだ。

そのことは、なにも諜報部員でなくても、社会人を何十年とやってきたおじさんたちやおばさんたちだったら、みんなこっそり知っているのでもある。それは単純に人生経験というやつだ。

あの人はカネでは転ばなさそうだね、というイメージ。弱みとか撥ねつけそうだね、というイメージ。セックスなんかじゃ落ちないよね、というイメージ。そうしたイメージは、どこまでもイメージでしかないということ。イメージがどうであっても力学によって転ぶ。

大人たちはみんなそのことを知っているのだ。

だから、おじさんたちとおばさんたちは、いつもどうしようもなくさびしそうだろう？

ちなみにおれはどうかというと、おれはそんなことぜんぜん知りません。

おれは大人じゃないからな。

眠たいこと言ってるじゃねえ、おれならボウリングサークルの美女たちをテニスサークルに引きずり込むよ。

そして金持ちB子が、何も持っていないおれに転ぶ。

そういうことでないと、話として何も面白くないもんな。

はち

みつ

なすび

ペンネームはちみつなすびさん、こんにちはよろしく願いいたします。きょうも架空ですが対談よろしくお願いいたします。まず、そちら通信の具合はいかがでございましょうか。通信状態は、はい、良好でございすか。それならけっこうでございす、それではあらためてよろしく願いいたします、しばしのあいだお付き合いくださいます。

えーっと、子供のころに、字がヘタクソすぎて、数字の8を三つ書いたところ、小学校の先生に「これはなすび？」と訊かれて、いたく傷つきました！とのこと。それで、ハチがみつつで、それがなすびって言われたものだから、ハチ、みつつ、なすび。はちみつなすび、と。いやあなるほど納得させられる立派なペンネームです。どうなんでしょうね、はちみつなすびって。食べる前からいかにもおいしくはなさそうですが、食べてみたら案外いけるのかもしれない。はちみつつてけつきよく何にでも合いますしね。えー、もちろんいま現在、へたくそな字は克服し、ちゃんと数字に見える8を書けるそうです。よかったですね、人間なんでも努力つてものです。なすびに見える8もちょっと見てみたかったですけれどね。それでは、本題にまいりましょう、はちみつなすびさんから恋愛相談をいただいております。

はちみつなすびさんは現在、交際して三か月の彼氏さんがいるとのこと。おめでとございます。それで、はちみつなすびさんは、ご自身でおっしゃるところ、男性にはぐいぐい引つ張ってもらいたいタイプ。そうですね、そ

ういう方はやはり女性で多くいらつしやると思います。最近ではこんなことを言うともう女性差別だなんて言われちゃいますけどね。えー、ぐいぐい引つ張ってもらいたいタイプで、彼は頭もいいし体つきも立派なので、ついついそのことを期待しちゃいます！とのこと。しかし彼には弱気なところがあ、その原因を聞いてみたところ、どうも元カノのことを引きずっているようだとのこと。そんなことわたしに関係ないじゃん、と、泣きべそマークが書かれてあります。なるほどねえ。

これが交際して一か月記念の写真です、というところで、SNSのアカウントから写真を頂戴しております。えーっと、年齢は不詳とさせていただきますが、とにかくまだお二人ともお若い、まだまだ元気いっぱいのお年頃です。じつに楽しそうなお二人で何よりです。それは何よりなのですが、ここで一点。時代を感じるわけですからね。

わたしとしては、世代のものかもしれませんが、こうしてお付き合っているお二人が、付き合っているぞーという形でSNSに公開されているのは、なんだかびつくりしてしまうんですね。しかも写真付きだからドキッとしちゃう。あくまでわたしとしてはですがね。いまはこういうことが標準的なものかもしれないと、重々わかっていながらも、どこかどうしてもびつくりさせられちゃう。時代錯誤とは知りながら、お二人のことは、お二人のうちに留めておくもんじゃないのかなあと、そんな古めかしいこともどこかで思うんですね。ここはね、もちろんそれぞれの考え方なんですけど。だからこそ、あえてね、古い世代からはこういう考え方もあるぞーということをアピールさせてもらいました。何か少し参考にでもなればと思います。おじさんの話でごめんなさい。

それで、えーと。彼氏さんの、元カノという人。その元カノさんの、SNSアカウントもいただいております、それぞれ写真を拝見しております。それぞれ、というのはですね、これって元カノさんが二名、いらつしやるということですよ。片方はたぶん同い年ぐらい、もう片方はちょびつとだけ、年齢が上の女性でしょうか。そしてお二人とも、わりかし派手なタイプの女性という感じです。それぞれのご職業も、SNSの自己紹介には書かれているんですが、個人情報ですのでここでは控えさせていただきます。お二人と

も、なんというか、ごくふつうの、お堅い職業についていらっしゃるということです。それで、この元カノさんの、片方をユキちゃんと呼ばせていただくことにします。というのは、スキーがお好きなんでしょう、雪景色の写真がバツと見で多いのですね。で、もう一方の元カノさんを、ちょびつと年上かな、のウミちゃんと呼ばせていただきます。理由は同じ、海がお好きなのか、あるいはそういう場所にお住まいなのか、バツと見ると海のお写真が多いからです。

で、直近で別れたのは、えーっとユキちゃんのほう？　そして、ユキちゃんからさらにさかのぼっての元カノさんが、ウミちゃんということですね。すると、ウミちゃんと付き合っていたころは、彼氏さんのほうはまだ学生さんだったということでしょうか。そんな感じですよ。はい、それで、彼氏さんが引きずっている元カノというのは、どちらなんでしょうか。それが、このどちらでもあると。どちらでもあるし、はちみつなすびさんからすると、どっちがどっちなのか正直わからなーい（笑）と。そりゃそうですよね、元カノふたりの話をされても、聞かされている側はどっちがどっちなのかわからなくなりますよね。

いやあそれにしても、やはり驚かされるなーとは思っています。というのはね、その彼氏さんの元カノさんを、言ってみれば二代にわたって、こうしてSNSから写真で拝見することができるわけでしょう。そりゃ、当たり前なことなんですけれど、やつぱり驚きがあるんですよ。そのテクノロジーじたいに対してもそうなんですが、その、彼氏さんが、はちみつなすびさんに歴代の元カノをアカウントごと紹介するというか、展示するというか、そのことがやつぱり不思議だなーって思うんです。

いやわれわれの世代でもね、古い卒業写真なんか出してきて、お前どの子と付き合っていたの？　みたいなやりとりはするんですよ。でもそれってどこまでも過去のものでしょ。それはもう、すんげーむかしの思い出話みたいなノリでね。一方、SNSのアカウントというのは、なんというか、現在進行形で生きているものですからね。なんか、やつぱりびつくりしちゃうんですよ。たとえばわれわれの世代ではね、仕事の同僚とか、そういう何でもない知り合いのアカウントでも、やつぱり見ちゃいけないって感じがするんです

よ。なんだか他人のプライバシーを勝手にのぞき見しているような感じがしてね。いやそりゃもちろん、当人が公開しているわけですから、誰でも自由に見ていいんですけど、そのことはわかっていても、なんだか気が咎めるわけですよ。このあたり、新時代の感覚についていけないーい、というのがね、こっち側、おじさんたちのどうしようもない事実なんだと思います。

話を進めてまいります。はちみつなすびさんは……あ、ちょっとここですね、お名前が長いので、ここではちょっと短縮して、ハチさんと呼ばせていただきますね。ハチさんは、男性にはぐいぐい引つ張っていったほしいタイプで、さらに言えば、夜の、えーっとそういうことついては、やはり野性味あふれてガンガン来てほしい！　というタイプ。なるほどね、ワイルドなやつでね。少々のことならかまわないからガンガン来てほしい、と。大胆に書いてございます。ワオ。この少々のことという塩梅はまあ、じつにむつかしいところですけども。若い彼ならじゅうぶんにいけるところじゃないですね。えー、ここにはつきり書かれてありますのは、おつかなびつくり来られると、こっちも乗り切れなくてもややもやるからやめてくれー、と。男ならガツンと来てほしいカッコ笑いと、率直なところが書かれてあります。いやあなんかすいません。代わりに、ぼくが謝っちゃいます。なんだろーうな、なんだか申し訳ないですほんと。

その他の点というと、彼の、いい点も書いてございます。彼は、約束した時間はかなりきっちり守るタイプ。ああ、そうなんです。いいですね、そういう人って尊敬しますよね。パンクチュアルな人。あー、時間に正確な人って、英語では特別にパンクチュアルっていう、そういう形容詞があるそうですねですよ。きつとそれだけ大事なことなんでしょうね。できる人は偉いのであるの、自分とは対比があつてかなり好き、と。ありますねえそういうこと。自分と違うところを持っているというか、お互いに補い合えるところがあるというか。

しかし、その彼が、デートの最中、ちらちらと通りすがりの他の女を見ることがあり、そのことに死ぬほど腹が立ちます、マジきもい！　だって。一

度それであまりに腹が立って、その場できびすを返してデートをやめたことがある、そうです。うわーこれはキツイ。手厳しい。これはお互いにキツイですね、聞いているだけでこっちが縮みあがっちゃう。そういうのはねえ、男はねえ、野暮天というかマナー違反というか。あるいはそんなことじゃ済まねえよテメエというか。何はともあれ、そりゃあ少なくとも彼の側はとつてもブルーになったと思います。それでその後、何でしょう、彼にイタリア料理をおごってもらって、ちゃんと呼び直しました。いいお店だった！と書いてあります。なるほどね、いいですね。そういうのはね、おいしいもの食べて仲直りというのが一番です。せっかく付き合っているのにギスギスしてしまうのではないってことは、もうお互いわかっているわけですから。えーっとそれで、彼氏は、箸づかいが良いけれど、ナイフとフォークの使い方がヘタでみっともないので、そのところを絶賛教育中とのこと。あと、デートなんだからこつちと食べるペース合わせろ、カッコ怒りつつ書いてある笑。これおれも笑えねえなあ……これねえ、いやあそういうのあるんですよ。どうしてもね、男の子なんて子供のころどこか早食いも芸の内って褒められるもので、なかなかねえ、いい年になっても食事の仕方が荒っぽいってことあるんですよ。健康にもよくないので、それはどこかで修正していったほうがいい。がんばれば彼氏さん、応援しています。

そしてここで、ハチさんのご友人の、ふるるちゃんのお話です。ふるるちゃん、とてもかわいらしいお名前ですね。ふるるちゃんは、学生時代の同級生で、ハチさんがとっても尊敬しているご友人だそうです。すばらしいですね、そういうのうらやましいかぎりです。そしてふるるちゃんはつい先日、十歳年上の男性と結婚しました！とてもすばらしい結婚式で、ウェディングドレスのふるるちゃんが超キレーで、集まった同級生はみんな泣いちゃっていました、とのこと。まことにおめでとうございます、ふるるちゃんと、新郎の方、どうぞ末永くお幸せに！新婚旅行はどこに行ったのかな、ああうらやましい。

なんでもふるるちゃんは学生のころ、どうしても留学したい先があり、けれども学校側ではそのツテがなく、えーっと……その具体的な留学先はここでは伏せておきますが、たぶん留学先としてはレアなところだと思います。

どの国だこれ。彼女はその留学先に、なんと自らで掛け合って、当地にまで押しかけて説得して、自分を留学生として受け入れさせたのだということです。いやーすごいですね、なんというガッツというか、馬力というか。やりたいことはなんとしてでも実現させる！そういうふるるちゃんのことを、わたしは超マジで尊敬しています、これからもよろしくね、とのこと。ああ友情、友情は、げにうつくしきかな。

それで、そのふるるちゃんからすると、ハチさんが付き合っている彼って、うーんどうなのーと、いささか疑問符がつくようです。なるほどね。ふるるちゃんから見ても、ご友人のハチさんのね、交際相手ということになれば、たしかに気になるところ、虚心じゃいられないということはどうぜんあると思います。それでハチさんとしても、ふるるちゃんのことを尊敬しているぶん、どーなのーと疑問符つきで言われると、とても迷ってしまう、と。かといって別れる気はないけれど、自分の相手はこの人でいいんだろうか、結婚のこととか考えると……そんなこんなで考え込むと次第に落ち込んでいってしまうんです、というのがハチさんのお話です。そのところねえ、ハチさんとしては、彼にこそぐいぐい引つ張ってもらって、わたしの落ち込んだ気分なんか吹き飛ばしてちょうだい、ってところですよ。それなのに、元カノだの何だの、引きずっているとかで、そんなのどうしようもないことで、もやもやさせられて。ああやりきれない。わたしにどうしろっていうのよと、そういう気持ち、じつによくわかります。

そういうわけで、これからその彼とのことを、わたしはどうしていったらよいでしょうか、どうかわたしに愛の真実を！というのがハチさんからのお話です。はちみつなすびさんからのお話、たしかに承りました。

さて、どーなんでございましょう！　あーや、ふるるちゃんの口調が映っちゃったかな。伺いました、お話の全体を通してですねえ、うむむ。全体を通して第一に感じるのは、ハチさんから見て交際相手の彼というのは、まあずいぶん攻撃対象なんだなーということでしょうか。これはね、何も珍しいことではなくて。これも言ってみれば先ほどと同じ、この時代の、標準というやつなんだと思います。

これはね、いま、あちこちから話を聞いて、通底しているひとつの大前提

という感じなんです。女性からの恋愛相談というと、第一に、交際している男性に対する、まあ要するに攻撃なんですか。いつもの定番で、何であれば王道でさえあるなというところなんです。これは、古いことばで言うところと格闘講（りんきこう）と言うんですがね。これはもう、ことばが古すぎて、逆にわかりにくくなるので忘れちゃってください笑。まあむかしからきつと、妻というのはとかく夫への悪口が絶えないものだということなのだと思いますが、現代ではそれが恋愛相談というか、恋愛の悩みという文脈になるのが特徴なんだと、かねてから思わされているところなのでございます。

もちろん、楽しい瞬間や文句なしの瞬間もたくさんあるでございましょう。そりゃあね、せっかく若いお二人が付き合っているんだから、いろんなところで楽しいに決まっていますよ。でも、どうしても気に入らない瞬間とか、どうしても楽しくないときとかって、ありますよね。いつもいつも、調子がいい日ばかりではないですから。そういうとき、なんというか、彼に対して堪えがたく、激しい怒りが湧いてくるんだと思います。何かもう、猛烈なやつがね。それが、現代の恋愛相談というか、恋愛にかかわる話ではいちばん多いんですね。これ、言われてみればたしかにそうだ、つてことがとても多くて、ふしぎなことに、当人にとっては盲点になっていることがけっこう多いんです。

ハチさんもそういうの、友人から聞かされた話で、思い出してみればころあたりがあるんじゃないでしょうか。友人が、誰か男性と付き合っていて、ちょいと相談があるんだと言われて、聞かされてみると「これ、どう思う？」といって、要するに何か堪えがたい怒りと攻撃が湧いているんだなあというようなこと。それで三分後にはもう、「マジ許せないんだけど」と、言いたいことが素直に出てきて、ちょっと怒りに震えているじゃん、みたいな。そういうことがとてもよくあると思いますし、そのことに別にいまさら誰も、違和感を覚えるわけでもないわけです。われわれの現代の恋愛というところ、そういうもんだというのが前提になるかと思うんです。マジ許せないんだけどと言われて、アーわかるわかる、という共感で応える。それがいま、ぶっちゃけて言うところのスタンダードなんだというのは、言われてみて別に苦しいってものでもないでしょう。少なくとも、さっぱりわかりやせんというよう

な話ではないはずでございます。

これについて、男性のほうから恋愛相談みたいな話を聞かされるときはね、なんというか、男性の側がしょんぼりしていることのほうが多いんです。男性が、どうしたらいいかわからなくて、自分が情けないとか、不甲斐ないとか。どうしたらいいんでしょうかって、当人が困ってしょんぼりしている。そうして男性の側から相談という場合、けっきょくのところ、「勇気も力もない、だらしなない僕をなんとかしてください」と言うだけで、まあそれも情けないといえは情けないし、何かふざけているような気がしますけれどね。ただ「ウチの彼女をなんとかしてください」という、交際相手への怒りとか否定とか、攻撃とかに満ちた文脈というのはあまり見かけないもんです。少なくとも、主流という感じはまったくしないわけなんです。

男性の側は、いまいち情けないですが、それでもその場合、その男性はいちおう彼女のことを大切には思っているんだなあ、という感じがするんでございます。聞いているかぎり、あまりその男性を褒めたたえようって感じにはなりませんけれどね。それでも、付き合っている彼女を大切にしたい、大切にしようとしている、ヘタクソなりに、という部分は無邪気にある感じがするんです。

でもいまハチさんのお話を聞いているかぎり、お話の内容はすごくよくわかるし、なーんにもおかしいところはないし、ハチさんは頼もしいばかりなんですけれど、聞いていてさっぱり彼氏さんのことを大切に思っているという感じはしないんですね。たとえば、そうだなあ、たとえばハチさんからお話、ご友人のふるるちゃんのこととは、大切に思っているんだなあ、ということが伝わってきます。そりゃあね、当たり前です。そんなのわからないわけがない。話聞いてりやすぐわかるでしょってぐらい当たり前のことです。で、そのふるるちゃんのことと比べてしまえば、身も蓋もない話、ハチさんは彼氏さんのことを、別に尊敬しているわけではないし、大切にも思っているわけでもない。そう感じざるを得ないんです。といって、もちろん交際相手だから、いろいろ期待はしていると思うんですがね。でも、尊敬とか、大切に思っているとかいうと、あきらかにふるるちゃんに対するほうが上でございましょうと、そう言うよりないわけなんです。

ハチさんから彼氏さんに向けている感情は、期待とか、要求とかであって、尊敬とかいう感じではないし、とにかくことばの端々から「わたしの大切な人なんです」という感じはまったく聞こえてこないでございますな。

これね、ここ何年か、かねがね思わされていることなんです、こんなこと混乱するようなことじゃないって思うんです。整理すりゃあスーツと納得がいく。なかなか聞き慣れない話ですが、ここはまあ聞いてやってくださいな。

奇妙なことですが、あえてわかりやすく言いますと、ハチさんからの恋愛相談の、その主題はむしろヘイト感情なんだ、ってことなんだと思います。そこだけ聞くとおかしいですけどね。付き合っているのにヘイトって何だ、恋愛って言っているのにヘイトって何だと。ヘイトってのはもつと憎んでいる相手に向けるもんだろうってことになるんですが。

それでいて妙に、整合するとも思いません。ハチさんが彼氏さんに向けて、いちばん激しく覚える感情は何か。それはヘイト感情だ。妙な話ですけど、あらためて眺めてみるとじつにそうでございましょう。それで、その感情は、彼氏さんに対してだけでなく、彼氏さんの周辺にも及んでいると思えてくる。だからとにかく、極端に簡単に言ってしまうんですよ、「彼氏まわりのことは何でもかんでも、とにかくムカつく！」ということがある。この状態が、まさに現代の恋愛の主題なんだと思うんですね。それはもう、ツイッターとかそういうの御覧になっても、同じことを見つけられると思います。あ、いまはもうツイッターじゃなくてXですか。そのあたりもう詳しくわからなくて、じつはわたしはまだにリプだのリツイートだのの仕組みをよくわかつたらんのですがね。

なんで彼氏まわりのことになると、何でもかんでも腹が立つのか。堪えがたくムカつくのか。その直接的な理由はよくわからないんですが、そこはたぶん、セックスとかが関係しているのかなと思いますね。わたしも専門家でないんでよくわかりませんが。さっきハチさんのお話にも、何かマジきもいって怒ってらっしゃる部分ありましたものね。どこでございましたっけ。ああ、あれですね、彼氏がデート中にすれ違う別の女をチラチラ見てやがったと。それが死ぬほどムカついて、デートを中断してお怒りのまま帰ったとい

うお話でした。そのときの彼氏について、マジきもい！ という罵倒が添えられていたのでありました。女性は特に、この生理的に「キモい」ということに、なんというか、無理みを感じることが多いでございますな。無理み、ってこの使い方が合っていますかね。

なんというか、恋愛とセックスが一緒くたになると、それが「キモい！」ってなる。そういうことなんだと思います。たとえばその彼氏さんが、ハチさんと付き合う前、街中にいればどうしたってすれ違う美しい女性なんかをチラチラ見てしまうわけで、それが付き合う前ならハチさんはいちいちそんなヨソの男のことについて、キモいとかいって激昂はしないでございましょう。まあ、付き合う前のことって、いまだに想像してもちよつとリアリティがないかもしれないけれど。ただ少なくとも、すれ違う女性をちらりとも見まわってんじや、そもそも彼はハチさんとも付き合っていないせんわね。そんなお地蔵さんみたいな人、いきなり付き合おうやら恋愛やらになるわけがございせんから。

たとえばですが、そのあたりのコンビニエンスストアに行けば、棚には雑誌が並んでいてございましょう。そして、棚に並んでいる雑誌のうち、少年誌とか青年誌とか、男性向けの本というと、やはり多くは表紙にグラビアアイドルの写真なんか貼りつけてある。雑誌の中身はマンガなのに、表紙は女の子の水着写真なんですから、けつたいなことですわね。それも、季節なんか関係なし。真冬でも水着の写真が貼りつけてあって、こんなの寒くないのかって。それはつまり、季節とか水着を見せているのじゃなくて、女の子のエッチな肌を見せているってわけです。当たり前ですけどね。そういう業者は、男性がこういうものをチラチラ見てしまうということをよく知っていて、それを表紙にして、なんとか購買に引き込もうとしているわけです。女性の場合はあれでしょう、きれいなモデルさんの写真とか、宝石とか衣装とか、お化粧品とか、小顔になりますとかバストアップできますとか、そういうのが表紙に載っていると、オツと目を惹かれてチラチラ見てしまふ。つまりは、そういうふうにして雑誌というのは作られていますわね。それでね、十八歳未満の女の子だって、そうして水着姿になって、男性たちの目を惹くわけですよ。そういう仕事をしていて、そういう仕事のために

色んな努力をしている。それでいて、いちおうルールのには、未成年の女の子に欲情しちゃダメってなっているんでございますな。それね、欲情しちゃダメと言われましてもね。そもそも欲情しないものなら未成年の女の子は水着姿で写真集なんか撮らないでしょうし、雑誌はそれを表紙に貼りつけたりしないでしょう。われわれの目って、見ただけで相手の年齢がわかるわけでもないですし、だいいちおかしいでしょう、だって十八歳になる手前の、誕生日のちょっと前まで欲情なんかまったくゼロでございますとシーンと静まり返っていて、誕生日になって十八歳になったとたんチーンとスイッチが入ってハイ欲情しましたあー！　なんてことは、生きものの仕組みとしてあまりに不自然だ。ハチさんだってそれはさすがにそう思うでしょう。そんなの無理がありすぎるって。

だから、ハチさんの言うところには、いろいろその無理ってやつがあると思うんです。だってハチさんはあれでしょう、夜の、そういうときにはその、野性味あふれてガンガン来てほしいって話でした。そうでないとこっちも乗り切れなくて、やっぱりイライラするって。ワイルドにカモン！　って。そういうお話でした。それがね、ハチさんの彼氏さん、約束の時間はきっちり守って、ナイフとフォークの使い方はきっちり練習させられて、街中ではヨソの女をチラ見するようなことがあってはぜつたいにいけないくて、まっすぐ前だけ見ていなさいーって、そうやって制限されて制御されて、ハイそれでハチさんとホテルに入ったからには野性味をもって大爆発しなさいーって、それはさすがに無理があるんじゃないやござんせんか。そんな、適宜にスイッチをオンオフできるロボットみたいな生きものってあります？　そりゃ人間、まあ何かしらの修行を猛烈に積めば、そんなことができる人もあるのかもしれないが、それはすくなくともまったくワイルドではない。野生にそんな生きものはいませんもの。

だからこの場合、この場合というのかな、いまわれわれがいう恋愛って、そこところで「キモい」という、強烈なヘイトが主題なんですきつと。なんでこうなったのか、あるいはもともとこういうものだったのか、それは誰にもわかりませんけれど、さしあたりわれわれが直面するというか、この場合はハチさんが直面することですけれど、恋愛ってのは「キモい」っていう

堪えたいヘイトが主題なんでございます。つくづくふしぎなことにように感じます、ドーしてわざわざ言い寄って密着してヘイトを主題にするの。

そんで、そのヘイトって感情は、時代によって風潮によって、いくらでも変わるじゃございせんか。たとえばかつて、昭和のころなどは、みんなして駅のホームで煙草をぶかぶか吸って、それを線路にボーイと投げ捨てていたでございましょう。そのことは、当時だって「やれやれ」みたいに思われていたでしょうけれど、いまみたいにマニアックなヘイトを爆裂喚起するようなことはなかった。

それでいえば男女差別とか人種差別なんかもそうでございます。むかしはやれ女子社員といえはお茶を淹れさせられていたそうだし、たとえばマンガで言えば「ジャングル黒べえ」なんてタイトルのマンガがあったそうですからね。いまの時代じゃこんなもの炎上もいいところでしょう。ただかつては、そこにそんなマニアックなヘイトの爆裂はなかった。

たとえばね、ちよつと話が長くなって申し訳ないですが。これは、ずっとむかしの、大学生だった友人の話なんですけれど。彼は当時、まだ二十歳になつていなかったかなあ。彼は家庭教師のアルバイトをしていたんですよ。生徒は、十五歳、中学生の女の子。彼女は勉強熱心ではなかったけれど、次第に家庭教師の彼と打ち解けて、だんだんと受験勉強に本腰を入れていくことになったんですって。彼はその女の子のことを「かわいいやつよ」と言っていたけれど、そのときはそんな性的な意味はありませんでした。彼は柔和で気安い奴でしたから、その女の子も打ち解けやすかったんだと思います。

ただあるとき、受験勉強も一区切りついたころだったと思いますが、彼がいつもどおり家庭教師をしに彼女の部屋にいくと、彼女はいったん部屋を退出して、何やら家庭教師の彼をしばらく待たせ、ふたたび静かに部屋に戻ってきたそうです。再び戻ってきたとき、なんと彼女は全裸だったんですって。

震えながら、どうしたらいいかなんてわからないまま、裸で彼の前に突っ立って、何事かをしようと、おずおずと両手を彼に差し伸ばしてきたそうです。それで、その後いったいどうしたのと、ついわたしも気になって聞いてしまいましたかね。彼のほうも、そっち方面が得意なわけでもなし、何を言うかと思つたら、何を言えればいいかなんて皆目わからず、ただ「服を着ろ」と

言ったそうです。それを聞かされたときは、マヌケな感じもしましたが、それ以上に、そりやそうだなとも思わされましたけれどね。それで、バカなことしちゃいけないというような、まるでどこが聞きかじったような陳腐な説教を無理やりしたそうです。それを受けて彼女が、ちゃんと考えるし、受験も成功させるから、せめてキスだけしてほしいと言うんだそうです。目に涙をためて。こんなの、誰が見てもふざけてやっていることじゃない。まずは何より、無知で無垢な彼女を傷つけないためにはどうすればいいか。

それで、どうでしょう、大学生の家庭教師と、十五歳の中学生女子というのは、本来ヤツちゃいけない関係だとは思いますが、当時はそこまで厳禁とかって、誰も思っていたわけじゃなかった。何がまずいといって、当時はまだそれが条例違反になったわけではありませんから、まずいといえれば何かしらで彼女が傷ついたり、後悔したりすることでございました。とはいえ、彼女はまるで決死の覚悟でございましょう。無下にするのも彼女が傷つくじゃございせんか。それで彼は、まるで先輩ぶってキスだけして、そのじつ頭をくらくらさせながら、なんとかその場を収めたそうです。

その後につきよく、そのふたりはごくふうに付き合ってたそうですよ。彼女の側が親にも話して、親のほうもすんなり受け入れたらしくてね。おおらかなご両親だったんでございましょう。それでまあ、そうなると、やることもやつちやっただございましょう。でも特に、その後に揉めるわけでもなし、見る限りでは仲睦まじくしていました。その後どうなったのかなんて、詳しいことはわかりませんけれどね。

この当時、大学生の家庭教師が、十五歳の女の子とキスしちゃったということは、そんなにヘイトの対象じゃなかったんでございますな。キモい、なんて思わなかった。その後、けっきょくやることをやってしまったとして、それはもう、周囲としては「はあ、それはまあ、おめでとう」という感じでした。さわやかというほどにさえ、特にインパクトじたいがない薄味の話で、そもそもそうした二人が付き合っているということに関心が向きませんでしたね。当時は。若すぎる女の子とセックスしているということに、思えばうらやましさはありましたが、あまりそういうことに関心が向きませんでした。テレビゲームをいじりだして数秒も経てばすっかり忘れていましたよ。

なんか、他人のそういうことに関心が向く時代じゃなかったんです。色んなことに情熱を向けるのが忙しかったと、ちよつと昔話を美化して申し上げておきましょう。

現代ではそうじゃないんです。大学生の家庭教師が十五歳の女の子とキスしたとなったら、「うわ、キツモ」という感情が強烈に湧く。ただならぬヘイト感情が湧く。キモくて無理。嫉妬もあるかもしれないが、その嫉妬も含めてとにかく「キモい」。そういう感触がする。しかもそのあとセックスもしていますからね。キモいんです。とても堪えられたものじゃない。ハチさんが混乱しないように、ここでは大学生の彼を、あなたの彼氏に置き換えて考えてみてください。その十五歳とのキスシーンは、ハチさんにとって何かわけのわからないほど、キモい、おぞましい、無理、というヘイト感情が湧くもので、同時に果てしない攻撃衝動が湧き上がってまいりましょう。もう誰の感情だかわからないような感情が、虫酸と共に全身を駆け回るわけです。

こういうのは、個人の感情じゃあないんです。集合的無意識なんて言いましてね、これはこの時代の、集合的な感情であって、集合的な気持ちなんです。それだけに、個人では制御のしようがなく、そこに湧いてくる感情の量も、怒涛のようであって、まったく果てのないものなんです。といってね、もちろん、十五歳とキスしちゃいましたというのが、どこの誰とも知らない、ド田舎のヒマな若者ということなら、そんなことにいちいちキモいなんて思いやしません。

なんとも思わない。それは、そこにころがない場合でございますな。ころを向けていませんから、またころが触れてございせんから、「へえ」とか「ふーん」とかで済みます。でもハチさんは、さすがに自分の恋愛、自分の交際ということになると、ハチさん自身の価値観や、意地とかこだわりまで含めて、自身のころというのが関わってくるでございましょう。このころというものが関わってきたとき、さっき言った集合的なものがワーツと流れ込んでくるんです。自分のころじゃないものが流れ込んできて、それが何より強烈でたしかに、自分のころになっちゃいます。

集合的にはいま、男性のセックス機構、それじたいがつまりキモいんです。男性に、男性のセックス機構があるという、そのことじたいがね。

いまこうした単語を聞くだけで、何かもう無理とか、キモイとか、ヘイト感情が湧いてくるでございましょう。

それでハチさんは、そんなキモいものに、尊敬なんて覚ええないし、大切な何かだなんて思わない。彼氏だかなんだか知らないが、男性のセックス機構がついていやがる。キモいっただけじゃない。キモいんですからそんなもの、ひたすらヘイトするだけです。

ここで、整理するところになります。ハチさんは、男性のセックス機構について、原始的・根源的であってほしいと望んでいて、そうでないとこっちも乗れないと感じています。ですが、そのハチさんが望んでいる男性のセックス機構が、堪えがたく「キモい」んですよ。この世の終わりというぐらいキモい。だからハチさんは本質的に彼のことを軽蔑するし、ヘイトを覚えて攻撃する。

くれぐれも、それはハチさんの個人的なところじゃあないんです。集合的なところが、ハチさんの個人的なところに入り込んで、つまりはハチさんのもとあったところを呑み込んでしまい、流れ込んだそれが他ならぬハチさんのところだということに、書き換わっていくわけです。

だからいま、芸能界のスキヤンダルなども、ヘイト感情が爆裂するのはそのつち方面になっただけでございましょう。いちいちのことは取沙汰いたしません。ああいうのもつまりは、男性のセックス機構そのものがキモい、ということに尽きてございます。スキヤンダルにかかわってはいろんな情報飛び交いますが、もう事実がどうかなんて人々にとってどうでもいい。そういうのが、見ていてわかる、あるいは見ていなくてもわかるでございましょう。男性のセックス機構そのものがただキモい。ひたすらキモい。無理。ヘイト感情が圧倒的に無理。見るだけで吐きそう、想像するだけで吐きそう。いま芸能人が十五歳の女の子と個人的にキスしたということがバレたらもう再起不能でございましょう。仮に女の子の側が求めたことであったとしてもそれはもうキモいんです。男性に男性のセックス機構があるということじたいがキモい。そのことを回避するには、もう一切のこころを接触させないというぐらしか回避方法がありません。

ちよっと余談ですが、世の中の少なからぬ夫婦というのは、じっさいふた

りとも一切こころを触れ合わせず、だから夫婦としてセックスができるというのを、けっこうやっているものでございます。もちろんそんなことはTVショーで大っぴらに言われることはありませんが、それだってけっこう掘り出してみれば現代では標準的なもののひとつと言えてしまうのでございます。

もしハチさんの彼氏さんが、いま駅のホームで煙草を吸って、その吸殻を線路に捨てたら、それだけで「無理」ってなるでしょう。少なくともハチさんの友人から見れば彼は「無理」になる。線路に吸殻を捨てたとして、そのことがどんな重罪になるのかというと、きつと重罪にはならないんでございましょう。けれども、司法がどうこうじゃない、集団的なところとして「無理」になる。キモさが湧いて、根っこから湧いてくるヘイト感情が止まらなくなる。それはハチさん個人の感情ではないんです。

それと同じです。ハチさんが男性のセックス機構を要求しながら、それと恋愛しようところを向けることが、ハチさんの内部に、ハチさん個人のものではないキモさとヘイト感情を湧き出させるんです。

さあこうしてじっくり考えてきますと、ハチさんにとって彼氏さんは、「恋愛対象だからヘイト対象」ということで、思いがけず説明がつくもんでございましょう。それがハチさんの恋愛というよりは、それが現代の恋愛なんでございます。だからもし、ハチさんの苛立ちと不快感を解決するというのであれば、それについてハチさんがどうこうするのではなく、世の中全体が変化するしかありません。世の中全体がどうなればいいか。つまり、世の中全体、その集合的なものが、男性のセックス機構を愛するようになるしかないわけでございます。これは、言うは易しということにさえ値しない、理論上はただそうなるねということにすぎないわけですが、もちろんご存じのように、いま世の中全体にそんな方向へ進もうという気配や予兆はいっさいございません。むしろ、そうではない方向へ進んでいく気配と予兆がばちばちにひしめいているわけですから、これからハチさんが彼氏さんに覚えていられるヘイトと攻撃衝動は、これまでよりずっと強くなっていくということを既定路線にして考えておかねばなりません。

なぜこんなことになったのか、経緯はまったくわからないのですが、ひょ

つとしたらまるで、世の中の集合的なころじたいに工作を仕掛けている悪い連中でもあるのじゃないかと思わされさえするわけです。国家レベルで、諜報部員が破壊工作を仕掛けているんじゃないかとさえ疑いたくなる。集合的諜報工作、みたいな。もちろんそんなことは、いわゆる都市伝説にしかありませんで、こんなところで座興にさえなりません。

ところで、おや、ハチさん聞こえますか。ハチさんから応答がございません。あーあー、接続状態が悪くなりましたでございましょうか。ハチさんはちみつなすびさん。聞こえますか、聞こえていたら応答してください。はちみつなすびさん。

はちみつなすびさん、お尋ねしたいことがあります。できたら答えてください。

はちみつなすびさんは、彼氏さんを信頼していますか。

また、彼氏さんは、はちみつなすびさんを信頼していますか。

もしもし。

ちょっと接続が切れてしまったようでございます。残念ではございますが、時間ですのでこのへんで。

書物

こんなエッセイを書いたところで、何かが進展するわけではない。

世の中がどう進展するかについて、影響を与えるわけではないし、じゃあわたし自身の魂を進展させるのかというと、そういうわけでもない、と思う。それは、ネガティブに捉えているのではなくて、そもそも、進展という捉え方が、肝腎なことに当てはまらないように思うのだ。

じゃあ肝腎なことって何だろうな。

当たり前だが、こうしておれが自分なりにエッセイを書くと、ここにはおれの書物が残るのだ。

ものすごく当たり前だ。

書物。

それは無為なものだろうか。

書物はそもそも、世の中を進展させるために著わされるものだろうか。

ここに著わしたエッセイとか、小説とかは、おれが書いたもので、どう見てもおれの書物だ。

「お前の書物はどれか」

と訊かれることがあったら、これがそのひとつです、と言って提出することができる。

誰に提出するとかいうものでもないよ。

書物が、それじたい無為のものか、それとも、じつはそうではないのか、という問いだ。

めずらしく文学者らしくなってきたではないか。

わたしの書物はこのとおりだが、あなたの書物はどれだろうか。

あなたの書物というのは、必ずしも、あなたが書いたものでなくてよい。たとえば、根っからのクリスチャンなら、聖書がわたしの書物です、とい

うことでよい。

書物というのは、きつと映画でもいいし、楽譜でもいいと思うのだ。どれもこれも、ざっくり言えば「書かれたもの」だからな。

舞台演劇でもいいし、絵画でもかまわないし、踊りだって、本物なら何かを著わすことにはなっているのだろう。

禅僧なら、坐禅という形じたいがその人自身の著わしたものであることがあるだろうし、念仏を唱える人なら、その念仏が自分の著わしたものであることになるだろう。

料理人だって、あるいは大工さんだって……

では、運動が好きな人は、死ぬまでずーっと走っていればいいのだろうか。そのへんがおれにはよくわからない。

おれ自身が、あまりそういう運動をしないので、経験的にわからないのだ。走るのが好きな人は、競技場のトラックを、ずーっと走って回り続けていればいいのだろうか。

それでいいという人もたしかにいるのかもしれない。

でもなにか、それはものすごく特殊な、数少ないタイプなんじゃないかと思える。

まあいいや。

とりあえず、ここではなるべく「書物」に寄せよう。

「お前の書物はどれか」

根っからのクリスチャンなら、聖書を示し、これがわたしの書物ですと言えばいいだろうし、仏道を往く人なら、経文を示し、これがわたしの書物ですと言えばいいだろう。

ただ、それが自分の書物だというからには、そこに何が書かれているかを、ちゃんと自分言えなくてはだめだ。

それはまあ、とうぜんのことではあるだろう。わたしの書物です、なんて言っているんだからな。

かといって、書かれてあることのすべてを把握する必要はない。

そんなむづかしいことできっこないからあきらめていい。

どこか一部分でもいいのだ。

指を差して、たしかに、

「ここに書かれているのが、わたしの書物です」

というのがあればそれでいい。

そうして「わたしの書物です」と語られるとき、もちろんその声とことばは、「その人そのもの」と聞こえるものでなくてはならない。

これでは言っていることがわかりづらいか。

いや、なんとなくわかってもらえるだろう。

たとえばあなたが、思いつきと衝動で、何かしらのライトノベルを書いてみたとする。

何か、作中に向けての空想や、小説っぽい文体のイメージを膨らませる。そしてライトノベルを執筆したとき、そこに著わされてくるものは、あなたの書物であるはずが、じつさいには残念ながら、「わたしの書物」というふうにはならないだろう。

そこに書かれているのは、何かしら膨らまされたイメージでしかなく、しかもたいていは「誰にでもありがちなイメージ」だ。それをもって「わたしの書物」ということには、残念ながらならない。

だからといって悪いとは思わないけれどね。

なにも入口から成功しようなんてあさましいことを考えなくていいじゃないか、ガンガン失敗しようぜ。

一方、わたしが今回ここに書いたエッセイや小説は、構成も着想もぐちゃぐちゃなのだが、じつに「わたしそのもの」ではある。

何度も述べたように、わたしは本心からしか話さないから。

本心からしか話さず、本心からしか書かない、だからあなたもよく知るとおり、ここにあるのはじつに「わたしそのもの」、あなたから見れば「この人そのもの」なのだ。

そうでなきゃこんなデタラメなエッセイなんて読んでいられないわな。

それで、内容がまあ、決して褒められたものではなかったとしても、ここにあるのは完全に「わたしの書物」となる。

仮にあなたが、とても頭の良い人だったとしよう。理解力も記憶力もすぐれている。

さらにあなたは、本の虫というやつで、大量に本を読み、そのひとつひとつの内容をしつかり覚えていたとする。

それで、一般に高度とされる書物のことごとくについて、あなたがものすごく詳しくなったとしても、それらについて詳しいというだけでは、それは「あなたの書物」にはならない。

仮にあなたが、森鷗外の全集・全文を丸暗記していたとしても、それは頭の中に青空文庫のデータがあるというだけにすぎず、それをもって森鷗外があなたの書物ということにはならない。

あなたの書物はどれだろうか。

あなたは、わたしが書いたものを読むことで、わたしのことを理解することができる。

理解というより、正確には、わたしに会うことができ、わたしを知ることができる。

さらにはあなたは、大江健三郎を読み（といっても笑いながら読めよ）、フロイトの全集を読み、河合隼雄を百冊読み、ムツゴロウさんの全集を読み、銀河英雄伝説を読み、イースⅠ・Ⅱをクリアし、アサシンクリードをほぼ全シリーズクリアし、ぶよぶよで十四連鎖ぐらいいは組めるようになって、ジュダスブリストとスキッドロウとインペリテリをひととおり聴き、桑田佳祐も一通り聴き、遡ってポプデイルンもあるていど聴き、まったく興味の湧かない男声合唱曲も聴き、宮崎駿作品の前期作品は入念に観て、映画「タイタニック」も観て、エイドリアンライン監督の映画はすべて観てその中に描かれている秘密をすべて読み取り、幕末の大久保一蔵の仕事を覚えて青ざめるといっていどには歴史に通じ、数学の二次曲線や物理化学の単位ぐらいいは読み取れるようになって、あとはわたしがどこぞで教えている身体操作と武術みたいなのをひととおり学んだら、あなたはおれのことを知ることができる。

なんだか列挙していると気恥ずかしいが、おれのすべてなんてだいたいそんなもので出来ているのだ。

たいしたものではないのだ。わっはっは。

とはいえ、それでさすがにおれのすべてというのは言い過ぎか。あくまで、

おれの「書物的な側面」のすべて、ということになる。

書物的な面ではない、直接歩いた場所や、直接過ごした時間などは、さすがに省かれてしまう。

ただ、その「書物的な側面」というのが、じつは思いがけずデカいのかもしれないと思うのだ。

書物的な側面なしに、直接歩いた場所とか、直接過ごした時間とかだけが、独立してありうるものだろうか？

どうもそんな気はしないんだよな。

あなたは、おれの書物を読むことで、おれを知ることができる。

では逆に、おれは何を読めば、あなたを知ることができるだろう。

「あなたの書物」はどれだ。

もし、どの書物を読んだとしても、あなたのことを知ることが得ないのだとすると、あなたには未だ、書物的な側面がないということになる。

どうなんだろうな、それでいいのだろうか。

人の「書物的な側面」なんて話、ヨソではほとんど聞いたことがないので、それが必要なことなのかどうか、あまりにも根拠がない。

ただなんとなく、おれの直感が、何かをこそ伝えてくるのだ。

その「書物的な側面」というやつが、思いがけずデカいですよ、存外デカイ、いやあけっこう支配的だ、というようなことを伝えてくる。

うーん、完全に、ただの気のせいかもしれないけれど。

「わたしの書物」というのがなかったら、何がどうなるというのだろうか。

「わたしの書物」がなかった場合、

「じゃあ、該当なし、ということですね」

ということになるのかというと、そうはならない。

書物というのは、この世界で書かれたすべてのものを含むのだ。

ツイッター（X）や、ウェブ掲示板等で書かれたコメントなども、すべて「書物」に含まれる。

思いがけないことにあなたは、ツイッター（X）に書かれている、膨大な悪口雑言、罵詈雑言、厭味や愚痴といったものについて、

「あのさあ、これってあなたの書物じゃないの？」

と訊かれるのだ。

あなたのアカウントでもなければ、あなたの書き込みでもないものについてだよ。

もちろんあなたは、エエツとびっくりし、

「それはわたしの書物ではありません」

と断固として言うだろう。

ところがだ。

あなたはたとえば、聖書に書かれていることと、経典に書かれていること、ツイッター（X）でつぶやかれていること、この三つについて、

「どれにいちばん通じているか」

と訊かれるのだ。

訊かれるというか、それを調べられる。

そのときとうぜんながら、きゆうに言われても、聖書に何が書かれているのかなんてわからないし、それをうまく言うなんてことはできない。経典に何が書かれているのかなんて、さらにわからない。うまく言うなんてできるわけがない。

それでじゃあ、ツイッター（X）に書かれていることはどうなのかというと、あなたはそれについてはスツと理解できて、そこに何が書かれているのかがわかってしまうのだ。何が書かれているかについて、あなたはうまく言うということまでできてしまう。

それで、

「じゃあ、これがあなたの書物ですね」。はい、登録完了いたしました。ではこちらでの手続きは以上となります。次のレーンにお進みください」

ということになってしまう。

そしてあなたは、その書物にふさわしい何かとして扱われ、何かになってしまふのだった。

説明になっていないが、もちろん説明する気がないし、こんなこと説明する権限なんか誰にもない。

自分がいちばん通じているものが、自分の書物ということにされてしまう。おれの場合、その点では安心だ。

ツイッター(X)に書かれていることについて訊かれても、「そこに書かれているものは、目立ったものは悪口雑言と罵詈謗、あるいは厭味や愚痴です。一部にはネタやジョークというのもありますけれど。何にせよ、それらはわたしの書物ではありません。なぜなら、わたしにはわたし自身が著したあきらかな書物があり、それこそがわたしの書物だからです。またそれ以外にも、優れた人によって書かれたわたしの書物と呼ぶべきものが多数あり、わたしはそちらに通じているのです。それに比べると、わたしはツイッター(X)などにはまったく通じておらず、そちらはわたしの書物ではないのです」

と、堂々と語るわけだ。

あなたの語る声、その波長はどの書物にいちばん近いのか。

あなたの語る声、その響きはどの書物に一番通じているか。

そうしたことから「あなたの書物」が決定される。

仮に、そうして決定された「あなたの書物」が、あきらかに焼き捨てられたほうがよいものと判断されたらどうなるか。

その場合、あなた自身もその書物と一緒に焼き捨てられてしまう。

要らないものとして火の中にポイと投げ込まれるのだ。

それではあまりに無念すぎるよなあ。

ちなみに今このとき、われわれ日本人にとつての最大手、最もポピュラー

な「わたしの書物」とは何か。

それはもう、言わずもがな「文春」だ。

甘ったれてはいけない、それがわれわれの事実じゃねえか。あなたの書物は「文春」ですわねーということで、次のレーンに送り込まれてしまう。

なかなか無慈悲だが、しょうがない。

われわれ自身はなぜか、文春その他の週刊誌を、焼き捨てないのだからしょうがない。

われわれはいま、文春その他の週刊誌を、正の書物として、その権威を奉っているのだ。

文春という書物に従い、われわれは著名な人を処断している。

それが事実だからしょうがないよなあ。

何が「あなたの書物」になるのか。

このことはちよつと説明がむづかしいのだ。

たとえばあなたが、マンガ「ワンピース」の熱烈なファンだったとする。そのアニメキャラクターの声も、ずいぶんな伎倆で模倣できたとする。

さらにはいろんなイベントで、そのアニメキャラクターのコスプレをして歩きまわった。

だからといって、マンガ「ワンピース」が、あなたの書物ということにはたぶんならないのだ。

あなたはただマンガ「ワンピース」のファンなのであって、ルフィの魂があなたの魂を形成したというわけではない。

あなたはコスプレの衣装を持ってコミケに行くのであって、イカダを持って海に行くのではない。

だからあなたの声は、「ワンピース好き集まれ☆407」というスレッドに通じている。

それは、「ワンピースに自信ニキ」の声であり、あるいはコスプレアカウンと「いいね!」の声だ。

別にそれが悪いというわけではない。

ただ、ワンピースが「わたしの書物」ということにはならないと思われる。

そもそも書物とは何であるのか。

書物とは、「世界とはこのようである」という真相を記述したロゴスのことだ。

たとえば、太宰治がわたしの書物ですという人は、とうぜんながら、「人間失格」を抱えて、「世界とはこのようなのです、これが真相なのです」と言っているに等しいということになる。

「世界とはこのようである」ということ。

それを記述してあるロゴスとして、いちばんブレーンなのはきっと新聞のニュース記事だろう。

〇〇社と××社が経営統合に向けて合意、というような記事があると、たしかに世界とはこのようであるということを書わしている。

とはいえ、それだけだと世界をただ「世の中」に限定していることになる

ので、あきらかに不十分だ。新聞記事だけでそれを佳き「わたしの書物」とすることはできないだろう。

逆に、「世界とはこのようである」ということについて、いちばんオリジナルどおりに書かれているのは神話だということになる。

日本の場合「イザナギとイザナミが」で、聖書の場合は「光あれ」。まさに、世界とはこのようであるということの、いちばんの元々とされるもの。

あなたの書物はどれだろうか。

おれの書物は、きょうはこれだ。

今回、いちおう「信頼」ということをキーワードに書き進めてきた。

わたしが現代で見かける、あちこちの、威勢の良い人たちは、互いに信頼しあっているのだろうか。

わからない。ただ、勝手に決めつけるべきではないと、とうぜんながら思っている。

それでもわたしの目には、まるで彼らが信頼しあっていないというように見える。

仲は良さそうなのだが、信頼関係があるというふうに見えない。

信頼、なんて偉そうに言って、わたし自身はどうなのか。

われこそがア、その輝かしき信頼というものに、アア至りし者にて候、かしこみかしこみ申すウと、威張り尽くせるような根拠や実績を、おれはまったく持ち合わせていない。

ただいちおう、おれのできるかぎりのこととして、おれは本心から書き、本心から話すようにしている。

それはきつと、ホンネをぶちまける、というような安易なこととは異なるはずだ。

こんなことをしていても、世の中の進展にはまったく寄与しない。

世の中のみならず、べつにおれの魂だって進展しないだろう。

だがわたしはそもそも進展なんてことを求めているのではないらしい。

これでもいちおう戦っているのだ。

これしか戦い方がないというように感じている。

もし、わたしが信頼なんてものを得られるとしたら、そのことはきつと、次の一点にのみ懸かっているだろう。

いわく、「わたしの書物」が、まったくわたしそのものであること。

そう考えてみればけっこう単純なことなのかもしれない。

要するに、ただの同一性だ。

わたしの書物と、わたしそのものが、なんともいえず同一だということ。そりゃあな、「わたしの書物」なんて言うからには、なるべくそれはわたしそのものと同一でなくてはならない。

書物はまた、本質として、「世界とはこのようである」という真相のロゴスでもあった。

だから、「世界とはこのようである」というロゴスが、わたしそのものと一でなくてはならない、ということになる。

そのときようやく、信頼というものが得られる。

それだってただの同一性だけだね。

同一性といって、つまり、わたしと、書物と、世界が同一ということか。

うーむ、これはちよつと不気味なことになってくるなあ。

先ほど、人には書物的側面があるというような言い方をしたけれど、これじゃあまるで、三つの要素がすべてそうした側面を成しているというように聞こえてくる。

書物的側面と、わたしの側面と、世界的側面、それらが同一だ、と言っているということになる。

うへっ、なんか気持ち悪い。

ヨーガ的な考え方で、わたし（アートマン）と世界（ブラフマン）があるのはわかるけれど、そこに書物的側面なんてのが入ってくるというのは聞いたことがないぞ。

まあいいや、今回は「信頼」が主題の話だし。

なんかヤバイ話になったからそっちはとりあえず置いておこう。

わたしが知っているのは、書物について、これを著わすというまるで無為なことが、わたしにとってはまったくさびしくないということだ。

作業としては完全に孤独な作業なのにね。

わたしは、本心から書くし、本心から話す。

本心からしか書かないし、本心からしか話さない。

それが、「わたしの書物」と「わたしそのもの」に同一性をもたらすのだろう。

わたしが、何の進展にもならないくせに、まるで無為なようなこの書き話をえんえんとやっているのはなぜなのか。

これはいったい何の営為なのか。

さしあたり名づけるなら、これはどうも、何かしら「同一性の営為」ということのようなのだ。

わたしの書物。

わたしそのもの。

世界はこのようである。

うへっ、やっぱり気持ちわるい。

同一性ということについて、そして信頼ということについて。

ごまかしながら書いてきたけれど、やっぱり、お互いに信頼があるほうがいいよなあ。

いま、信頼関係がないグループというほうが、芸風としてはウケているというか、ヒットしているのだと思うけれど。

商売としてそちらを進めるのは、そういう業者としてはしょうがないとして、それでも誰だって本心からそれをよろこんでいるわけじゃないと思う。

あなたはもともと、信頼に足る存在なのだ。

ただ、同一性が損なわれているだけなんだな。

なぜ同一性が損なわれていってしまうか。

それはきつと、「わたし」と「ホンネ」に同一性を求めたからだ。

一般的には、「わたし」と「ホンネ」は、ほとんどイコールのように思われているのだからけれど。

おれの知る限り、それは単純な誤りだ。

「わたし」と「ホンネ」に同一性はない。

「ホンネ」というのは集合的にいくらでも変わってしまう。

先月と今月でホンネは違うし、きょうと明日でもうホンネは変わってしまう。

う。

同一性を求めるなら、もういつそ、「本音」はあきらめて、「本」にしてしまいなさい。

本でも書物でも話は同じだ。

うーん、やっぱり書物って、なんか思ったよりヤバイ何かじゃないか。本がわたしになり、わたしが本になる。

うへっ、だから気持ち悪いっての。

わたしはいま、ますますヤバイものが視えかかっているのだが、さすがにもうそんなことを書いていられないので、今回の話はこれでおしまい。

わたしは書物を著わしたのであった。

もともとそれがやりたいといっただけなんだしな。

本を手にとると、あるいは物を手に取ると……

うへええ、気持ち悪いのもうこの話は終わり。

本を手にとつて、物を手に取つて、あなたと同一性を与えない。手に取る思いがけないもの、何でもないものが、それじたい「あなた」なのだ。

そのことを迷わせているのがあなたの「ホンネ」だ。

現代の、ホンネ・アカウントのつぶやきにだまされてはいけないよ。

10年代から、ここまでの十五年間は、ひょっとして、ホンネの時代だったのだろうか？

まあいいや。あなたは同一性にかかわり、ホンネにだまされてはいけない。同一性ってたぶん、めっちゃ思いがけない、とんでもない形で存在しているから。

じつさい、あなたはこのわけのわからない話を聞きながら、なぜかこのとき、すっかりさびしくはないでしょう。

わけがわからんよね。

さびしくなったらまた読みにいらっしやい。

それでは、また。

「彼らは信頼しあっているのだろうか？／了」